日本女子讀本

改制第一版

卷八

375.9
Ta11
資料室

43149
教科書文庫
4
810
42-1937
2000-0
34991

資料室
375.9
Ta11

文部省檢定濟
昭和十二年二月二十七日　高等女學校國語科用

文學博士　高木武編

日本女子讀本

改制
第一版

東京　冨山房藏版

大和路の西行　岩田正巳筆

廣島大學圖書之印

広島大学
教
34991
図書

日本女子讀本

改制第一版　卷八

目次

一　菊花の約　上田秋成　一
　一　一
　二　七
二　山路來て（俳句）（諸家）　一五
三　草箒　永井荷風　一九
四　長柄堤の訣別（戲曲）　坪内逍遙　二五
五　演劇の鑑賞　小山内薫　三六

六　信乃の生立　瀧澤馬琴　（諸家）　五七
七　古今調と新古今調（短歌）　藤岡作太郎　六二
八　歌人西行　七一
九　日記と隨筆
一　出立　阿佛尼　七二
二　都がへり　紀貫之　七三
三　春は曙　清少納言　七六
四　うつくしきもの　清少納言　七七
一〇　須磨の浦波　紫式部　九九
一一　心の落葉　九條武子　八六
一　理智と情操　八六
二　許しあふ心　八七

三　虚僞の美　八八
四　不滅の仕事　八九
五　眠に入る時　九〇
一三　東下り　（伊勢物語）　九一
一三　隅田川（謠曲）　（觀世流謠曲）　九四
一四　芳賀矢一先生の尊靈の御前に　藤村作　一〇五
一五　唐詩抄（漢詩）　（諸家）　一一
一六　萬葉集抄（長歌と短歌）　（諸家）　一一三
一七　星夜讃美の女性歌人　新村出　一一九
一八　日本の文章と西洋の文章　谷崎潤一郎　一二九
一九　世界文化の二大系統　中村孝也　一三九

國民精神篇

日本文學の特質その二

廣島大學圖書之印

日本女子讀本

改制第一版 卷八

一 菊花の約

上田秋成

上田秋成（うへだあきなり）　江戸時代後期の作家、大阪の人、文化六年歿、年七十八。

加古の驛　今の兵庫縣加古川町。

清貧をあまなひて

一

青々たる春の柳、家園（いへその）に種うることなかれ。交りは輕薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交はりやすくして、去るもまた速かなり。楊柳幾たび春に染めども、輕薄の人は絶えて訪らふ日なし。

播磨國加古の驛に丈部左門といふ博士あり。清貧をあまなひて、友とする書の外は、すべて調度の煩はしきを厭へり。老母あり。孟母の操に讓らず、常に紡績を事として、左門が志を助けぬ。その

口腹のために人を累はさんや敢へて受くることなし

わきて

季女は同じ里の佐用氏に養はる。この佐用が家は頗る富み榮えてありけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘を娶りて親族となり、しばしば事に託せて物を贈ると雖も、口腹のために人を累はさんやとて、敢へて受くることなし。

一日左門、同じ里の何某が許を訪らひて、いにしへ今の物語して興じける時、壁を隔てて人の苦しむ聲、いともあはれに聞えければ、主に尋ぬるに、主「西の國の人と見ゆるが、伴ひに後れしとて、一宿を求められしを、卑しからぬ士と見しまゝ逗めまゐらせしに、その夜邪熱劇しく、起臥も思ふにまかせぬがいとほしさに、三日四日を過しぬれど、いづちの人とも定かならぬに、主も思はぬ過し出でて、心地惑ひはべりぬ。」といふ。左門聞きて、「悲しき物語にこそ。主の心安からぬもさる事なれど、病苦の人の、しるべなき旅の空にこの疾を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。そのや

死生命あり

我がともがらは取らず

方を案ず

うをも看ばや。」といふを、主とゞめて、「瘟病は人を過つものと聞ゆるものゆゑ、家童らにも敢へてかしこに行かしめず。立寄りて身を害し給ふことなかれ。」左門笑うていふ、「死生命あり、何の病か人に傳はるべき。これ等は愚俗の言葉にて、我がともがらは取らず。」とて、戸を推して入りつゝその人を見るに、主が語りしに違はで、なみの人にはあらぬが、病深きと見えて、面は黄に、肌は黑く瘦せ、古き衾の上にもだえ臥す。人懐かしげに左門を見て、「湯一つ恵み給へ。」といふ。左門近く寄りて、「士憂へ給ふことなかれ。必ず救ひまゐらすべし。」とて、主と計りて藥を選み、みづから方を案じ、みづから煮て

上田秋成

興へ、粥をすゝめて病を看ること、なほ同胞の如し。かの武士、左門が情に厚きに涙を流して、「かくまで漂客を惠み給ふ。死すとも御志に報い奉らん。」といふ。左門慰めて、「力なきことは、な聞え給ひそ。凡そ疫には日數あり、そのほどを過ぐれば壽命を過たず。我日々にまうでて仕へまゐらすべし。」とまめやかに契りつゝ、心を用ひて助けけるに、病やゝ減じて、心地清しく覺えければ、かの士、主にも懇に言葉を盡し、左門が陰德を尊みて、そのなりはひをも尋ね、己が身の上をも語りていふ、「我はもと出雲國松江の鄕に人と成りし赤穴宗右衞門といふものなるが、僅かに兵書の旨を明らめしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、我を師としてもの學び給ひぬ。さても我、近江の佐々木氏綱へ密使に選ばれて、かの館に逗まるうち、前の城主尼子經久、山中黨をかたらひて、大晦日の夜、不慮に城を乘りとりしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州

な聞え給ひそ

出雲國　島根縣。

富田　今の島根縣廣瀨町。城址は月山にある。

尼子經久　天文十年歿、年八十四。

は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤・三刀屋を助けて、經久を亡ぼし給へと勸むれども、氏綱は外勇にして內怯なる愚將なれば果さず、却りて我を國に逗む。故なき所に永くをらじと、己が身一つを竊みて還る路にこの疾に罹りて、思ひかけずも師を煩はしけるは、身に餘りたる御恩にこそ。我、半生の命をもて必ず報い奉らん。」左門いふ、「見るところを忍びざるは、人たるものの心なるべければ、厚き言葉をさむるに故なし。なほ逗まりていたはり給へ。」といふに、赤穴實ある言葉をたよりにて日を經るまに、物みな平生にちかくぞなりにける。

左門はよき友得たりとて、日夜交はりて物語するに、赤穴も諸子百家のことおろ〳〵語り出でて、問ひわきまふる心愚かならず。終に兄弟の盟をなす。赤穴五歲長じたれば、兄たるべき禮儀をさめて、左門に向ひていふ、「我、父母に別れまゐらせていと久し。

三澤・三刀屋　共に出雲の豪族。

己が身一つを竊みて

見るところを忍びず

延びなんに

青雲のたよりを失ふ

賢弟が老母は卽ち我が母なれば、新に拜み奉らんことを願ふ。老母憐みて幼き心を受け給はんや。」左門喜に堪へず「母常に我が孤獨を憂ふ。信ある言葉を告げなば、齡も延びなんに。」と伴なひて家に歸る。老母喜び迎へて「我が子不才にて、學ぶところ時にあはず、青雲のたよりを失ふ。願はくは捨てずして兄たる敎を施し給へ。」赤穴拜していふ「大丈夫は義を重しとす。功名・富貴はいふに足らず。我、今母公の慈愛を蒙り、賢弟の敬を受く。何の望かこれに過ぐべき。」と喜び嬉しみつゝぞ逗まりける。

昨日今日咲きぬると見し尾上の花も散りはてて、涼しき風による浪に、問はでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向ひて「我、近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見んためなれば、一たび下りて、やがて歸り來り、御恩を返し奉るべし。今の別れを賜へ。」といふ。左門いふ「さあらば、兄長いつの時にか歸り給ふべき。」赤穴いふ「月

このかみ

互に情を盡して

ものす

日は逝きやすし。おそくともこの秋は過さじ。」左門いふ「秋はいつの日を定めて待つべきや。願はくは約し給へ。」赤穴いふ「重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。」左門いふ「兄長、必ずこの日を誤り給ふな。一枝の菊花に薄き酒を備へて待ち奉らん。」と互に情を盡して、赤穴は西に歸りけり。

二

あら玉の月日は疾く經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野らの菊にほやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも早く起き出でて、草の屋の席を拂ひ、黃菊・白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊をかたぶけて酒飯の設けす。老母いふ「かの八雲たつ國は山陰のはてにありて、ここへは百里を隔つと聞く。今日とも定め難きに、その來しを見てものすとも遲からじ。」左門いふ「赤穴は信ある武士なれば、必ず約を誤らじ。その人を見てあわたゞしからんは、思はんこと

人の心の秋云云　「はつ雁の鳴きこそ渡れ世の中の人の心の秋しうければ」紀貫之、古今集）

の恥づかし。」とて、美酒を買ひ、鮮魚を煮て厨に備ふ。

午時もやゝかたぶきぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心醉へるが如し。老母、左門を呼びて、「人の心の秋にはあらずとも、菊の色濃きは、今日のみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨に移りゆくとも、何をか怨むべき。入りて臥しもして、また明日の日を待つべし。」とあるに、否み難く、母をすかして前に臥さしめ、もしやと戸の外に出でて見れば、銀河影消え〳〵に、氷輪我のみを照らして淋しきに、軒守る犬の吠ゆる聲澄みわたり、浦波の音ぞここもとにたち來るやうなる。月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸をたてて入らんとするに、たゞ看る、朧なる黑影の中に人ありて、風のまに〳〵來るを怪しと見れば、赤穴宗右衞門なり。躍りあがる心地して、「小弟早くより待ちて今に至りぬ。盟違へでは

來り給ふことの嬉しさよ。いざ入らせ給へ。」といへど、たゞうなづくのみにて、ものをもいはず。左門進みて南の窓の下に迎へ、座につかしめ、「兄長來り給ふことの遲かりしに、老母も待ちわびて、明日こそと臥所に入らせ給ふ。寤させまゐらせん。」といふに、赤穴また頭を振りてとゞめつゝ、更にものをもいはず。左門いふ、「既に夜をつぎて來給ふに、心も倦み、足も疲れ給ひつらん。幸に一杯を酌みてやすませ給へ。」とて、酒を煖め、下物を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、その臭を忌みさくるに似たり。左門いふ、「井臼の力はた、もてなすに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふことなかれ。」赤穴なほ答へもせで、長き息をつきつゝ、暫ししていふ、「賢弟が信ある饗應をなど否むべき理あらん。欺くに言葉なければ、實をもて告ぐるなり。必ずしもな怪しみ給ひそ。我は現世の人にあらず、きたなき靈の、假に形を見せつるなり。」左門大いに驚き

て、「兄長何故にこの怪しき事語り出で給ふや。更に夢とも覺えはべらず。」赤穴いふ、「賢弟と別れて國に下りしが、國人大方經久が勢につきて、鹽冶の恩を顧みる者なし。從弟赤穴丹治の富田の城にあるを訪らひしに、利害を說きて、我を經久に見えしむ。その言葉を容れて、つら〳〵經久がなすところを見るに、萬夫の雄、人に勝れ、よく士卒を習練すと雖も、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。永くをりて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることを語りて、去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、我を大城の外に放たずして、終に今日に至らしむ。この約に違ふものならば、賢弟我を何者とかせんと、ひたすら思ひ沈めども、遁るゝに方なし。古への人もいふ、『一日に千里を行くこと能はず、魂よく一日に千里をも行く。』と。このことわりを思ひ出でて、みづから刄に伏し、今夜陰風に乘りて遙々來り、菊花の約につく。

腹心爪牙の家の子

怨める色

この心を憐み給へ。」といひ終りて、涙湧き出づるが如し。「今は永き別れなり。たゞ母公によく仕へ給へ。」とて、座を起つと見しが、かき消す如く見えずなりにけり。

左門あわててとゞめんとすれば、陰風に眼くらみて行方を知らず。俯向に躓き倒れたるまゝに聲を放ちて大いに泣く。老母目ざめ、驚き立ちて、左門があるところを見れば、座上に酒瓶、魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中に伏し倒れたるを、いそがはしく扶け起して、「いかに。」と問へども、たゞ聲を呑みて泣く〳〵更に言葉なし。老母問うていふ、「赤穴が約に違ふを怨むとならば、明日もし來らば、言葉なからんものを。」と強く諫むるに、左門漸く答へていふ、「兄長今夜菊花の約にわざ〳〵來る。酒肴をもて迎ふるに、再三辭み給ひ、『しか〳〵の事にて約に背くが故に、みづから刄に伏して陰魂百里を來る。』といひて見えずなりぬ。それ故にこそは

身を翰墨に託す

今日を久しき日となすことなかれ

母の眠をも驚かし奉れ。たゞ〳〵赦し給へ。」とさめ〴〵と泣き入るを、老母いふ「牢裏に繫がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渴する者は夢に漿水を飲むといへり。汝もまたさる類にやあらん。よく心を鎭むべし。」とあれども左門頭を振りて「まことに夢のまさなきにあらず、兄長はここもとにこそありつれ。」とまた聲をあげて泣き倒る。老母も、今は疑はず、相よびてその夜は泣き明かしぬ。

翌る日左門、母を拜していふ「我、幼きより身を翰墨に託すと雖も、國に忠義の聞えなく、家に孝信を盡すこと能はず、徒に天地の間にをる。兄長赤穴は一生を信義のために終ふ。小弟今日より出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。尊體を保ち給うて、暫くの暇を賜ふべし。」老母いふ「我が兒かしこに去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。永く逗まりて今日を久しき日となすことなかれ。」左門いふ「生は浮きたる泡の如く、旦に夕べを定め難くと

商鞅　秦の政治家。

も、やがてかへり參るべし。」とて、涙を振うて家を出で、佐用氏に行きて、老母の介抱を懇に賴み聞え、出雲國に參る路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れて、まどろめば夢にも泣き明かしつゝ、十日を經て富田の大城に至り、まづ赤穴丹治が家に行く。丹治迎へ請じて、「翼あるものの告ぐるにあらで、いかに知らせ給ふべき謂れなし。」と頻りに問ひもとむ。左門いふ「士たるものは富貴消息のこと、共に論ずべからず。たゞ信義をもて重しとす。兄長宗右衞門一旦の約を重んじ、空しき魂の百里を來るに報いすとて、日夜を逐うてここに下りしなり。我が學ぶところに就いて士に尋ねまゐらすべき旨あり。願はくは明らかに答へ給へかし。昔魏の公叔座、病の牀に臥したるに、魏王みづからまうでて、手を執りつゝ告げけるは、『もし忌むべきことあらば、何人をして社稷を守らしめんや。我がために教を遺せ。』とあるに、叔座いふ『商鞅年少しと雖も

骨肉の人

榮利にのみ走りて

奇才あり。王もしこの人を用ひ給はずば、これを殺しても境を出すことなかれ。他の國に行かしめば、必ず後の禍となるべし。』と懇に教へて、また商鞅を私かに招き、『我、汝を薦むれど、王許さざる色あれば、用ひずば却りて汝を害し給へと教ふ。これ君を先にし、臣を後にするなり。汝早く他の國に去りて、害を免るべし。』といへり。この事、士と宗右衞門とに比へてはいかに。丹治たゞ頭を低れて言葉なし。左門座を進みて、『兄長宗右衞門、鹽冶が舊交を想ひて尼子に仕へざるは義士なり。士が舊主の鹽冶を捨てて尼子に降りしは士たる義なし。兄長が菊花の約を重んじ、命を捨てて百里を來しは信ある限りなり。士が今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、この横死をなさしめしは友とする信なし。經久强ひてとゞめ給ふとも、久しき交りを思はば、私かに商鞅叔座が信を盡すべきに、たゞ榮利にのみ走りて士家の風なきは、卽ち尼子の家風なるべ

結ぶべからずとなん

芭蕉 本姓名は松尾宗房、伊賀の人、元祿七年歿、年五十一。

其角 姓は榎本名は不詳、蕉門の俳人、江戸の人、寶永四年歿、年四十七。

し。我今信義を重んじて、わざ〳〵ここに來る。汝はまた不義のために汚名を遺せ。』とて、いひも終らず拔打に斬りつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立騷ぐ間に、早く逃れ出でて跡なし。尼子經久この由を傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憐み、左門が跡をも强ひて追はせざりきとなり。あゝ、輕薄の人と交りは結ぶべからずとなん。

（雨月物語）

二　山路來て

山路來て何やらゆかしすみれ草　芭蕉

閑さや岩にしみ入る蟬の聲　同

秋深き隣は何をする人ぞ　同

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春　其角

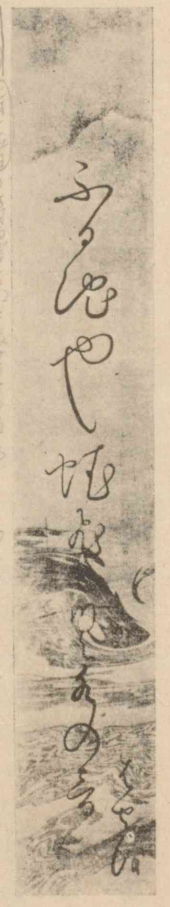
水打てや蟬も雀も濡るゝほど　同

嵐雪　本姓名は服部彦兵衛、蕉門の俳人、淡路の人、寶永四年歿、年五十四。

去來　本姓名は向井兼時、蕉門の俳人、長崎の人、寶永元年歿、年六十二。

丈草　本姓名は内藤林右衛門、蕉門の俳人、尾張の人、元祿十七年歿、年四十三。

雨蛙芭蕉に乗りてそよぎけり　其角
元日や晴れて雀のものがたり　嵐雪
名月や煙這ひ行く水の上　同
黄菊白菊その外の名はなくもがな　同
元日や家に讓りの太刀佩かん　去來



魂棚の奥なつかしや親の顔　同
おう〳〵といへどたゝくや雪の門　同
鶯や茶の木畑の朝月夜　丈草
春雨や抜け出たまゝの夜着の穴　同
稲妻のわれて落つるや山の上　同

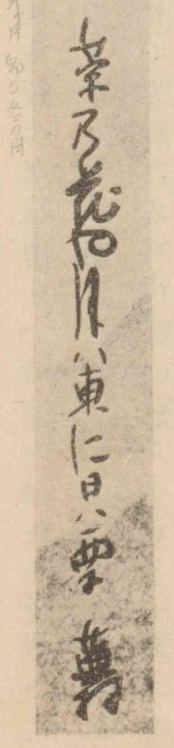
凡兆　野澤氏、名は不詳、蕉門の俳人、加賀の人、正德四年歿。

太祇　炭氏、江戸の人、明和八年歿、年六十三。

蕪村　本姓名は與謝寅、攝津の人、天明三年歿、年六十八。

鳥羽殿　今の京都市伏見區下鳥羽にあつた。

鶯や下駄の歯につく小田の土　凡兆
市中は物のにほひや夏の月　同
下京や雪つむ上の夜の雨　同
東風吹くと語りもぞ行く主と從者　太祇



寒月や我ひとり行く橋の音　同
美しき日和になりぬ雪の上　同
春の海ひねもすのたり〳〵かな　蕪村
公達に狐化けたり宵の春　同
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな　同

曉臺　本姓名は久村周擧、尾張の人、寛政四年歿、年六十一。
蓼太　本姓名は大島陽喬、信濃の人、天明七年歿、年七十。
召波　本姓名は黒柳清兵衞、蕪村に師事した、京都の人、明和八年歿。
几董　高井氏、蕪村に師事した、京都の人、寛政元年歿、年四十九。
一茶　本姓名は小林彌太郎、信濃の人、文政十年歿、年六十五。

日暮れたり三井寺下る春の人　曉臺
秋の山ところ〴〵に煙立つ　同
あら蓑の藁の青みや初時雨　蓼太
更くる夜や炭もて炭を碎く音　同
元日や草の戸越しの麥畑　召波
寺深く竹伐る音や夕時雨　同
山寺や緣の下なる苔清水　几董
名月や朱雀の鬼神たえて出ず　同
めでたさも中くらゐなりおらが春　一茶
けろりくわんとして鴉と柳かな　同
これがまあ終のすみかか雪五尺　同

永井荷風　名は壯吉、作家、東京市の人、明治十二年生。
雪ならぬ雪

三　草　箒

永井荷風

飛花は春に限らず、落葉また獨り秋のみならんや。山茶花の落つる時、冬漸く寒く、八手の花、雪ならぬ雪を降らせば、梔子の實、落霜紅と共にいよ〳〵赤し。梅櫻桃李のながめ昨日と過ぎ、垣には卯の花の雪積りて、藤棚のかげに紫の房もやう〳〵落ち盡せば、雀の子既に巣立して、あたりは夏なり。五月、松の花は閑庭の苔に金砂を撒き、七月、石榴の花は散りて、綠蔭に緋の毛氈をのぶ。

落葉は新樹の綠、潮の如く湧き出づる時より、庭の隅々、垣のきはに、掃き盡せぬばかりうづだかし。これ去年一冬の霜を忍びし椎・樫・槇・扇骨木の如き常磐木の古葉、若芽の伸ぶるに隨ひ、風をも待たで落ち散るなり。春盡きんとして雨多く、世には流行風邪の噂もありて、一重の小袖俄に薄寒き夕暮など、かゝる常磐木の落

思はずとものことども

葉、窓の障子にはら〳〵とおとづるれば、心は忽ち時雨の夕べに異ならず。思はずとものことども何くれとなく思ひ出さる。

扇骨木の古葉は、落ちんとする時、秋の楓の如く紅となり、青葉にまじりてちらほら花の如く目立ちて見ゆるも風情あり。竹の落葉に夏の暑さは漸く烈しく、樫・椎の古葉は土用に入りてもなほ散りてやまず。とかくするうち早くも秋立ちて、芭蕉の葉破れ、桐の葉落つ。

桐の一葉に秋を知る

「桐の一葉に秋を知る。」とは誰もいふことなれど、桐よりも早く散り落つるは梅・櫻の葉なるべし。桐の中にても碧梧の如きは、十月の半ば、その葉黄ばみて、なほ枝上にとゞまれるを見ること珍しからず。

柳も梧葉・荷葉・芭蕉と共に秋には脆きものの中に數へられたれど、初冬十一月、山茶花もはや咲き出でんとするに、御堀の柳を見れば、青き葉なほ落ち盡さざることあり。

御堀　宮城の御堀。

年中の景物およそ首夏の新樹と晩秋の黄葉といづれをか選ぶべき。この時節、ふたつながら夕陽甚だ美なり。一は密葉の間を染めて友禪の如く、一は黄葉に映じて錦繡の如し。然れども新綠は花にも似て束の間の眺なり。その軟かき綠は長からず、梅雨晴の日の光漸く強くなりゆくに隨ひて、綠は黑ずみて遂に盛夏の塵を浴ぶ。やがて、いつともなく朝夕の寒さ身にしみ來れば、風うち騷ぐ梢より、木の葉はその綠薄く黄ばみ出して、次第に日蔭の小枝にも及ぶほどに、初に色變へし木の葉まづひら〳〵とひらめき落つ。われ、何とは知らねど、わけなきに、日ごと夜ごとの物思、朝な夕なの憂さ辛さ身につもるこの頃、たゞ木の葉のはかなく色變りゆくさまうち眺むれば、花にも若葉にもいや增して、いひ知れぬ心地するなり。

去年の秋より冬にかけて、われ、人なき庭にたゞ一人落葉掃きつゝ、木々の梢の色變りゆくさま仔細にうち眺め、つれ〴〵の餘り手帳に控へおきけり。春より夏にかけて若芽・青葉の綠、木々により濃淡・强弱さま〴〵に湧き出づるを、もし西洋の音樂に譬へて、綠の管絃樂とも名づけ得たらんには、憔悴の詩情いひ難き黄葉の管絃樂は、まづ十月よりその序曲をば奏で出づるなり。

梅・櫻は盛夏の候早く病葉の黄ばみ落つること多けれど、そは數へざるべし。後の彼岸に殘暑も今は全く去りぬる夕べ、碧梧・橡・槐・皀莢の葉はいつしかうち黄ばみたり。我が庭に一樹の木蓮あり。木蓮は人その花をのみ愛づれども、黄葉またなか〳〵に捨て難し。樫の高き梢に百舌啼き叫ぶ十月となるや、大いさ柏の如き木蓮の葉は、淡くほのかに黄ばみ出づ。その色、曇りし日の夕まぐれ、夜まさに來らんとする境には、白く影の如くに浮き立つさま、はかなくもまたあはれなり。さても十一月となり、冬いよ〳〵迫り來れば、色淡き黄葉は次第に褐色となるより早く枝を去るなり。

萩もわれ花のみならで、枯れゆく葉をも愛づ。十月半ばより萩の葉は黄ばむと共に散りかけて、十一月に至れば一葉をもとゞめず。凋落まことに早し。これに比ぶれば、秋草の中にて葉鷄頭の十一月半ば菊花盛りの頃まで衰へながら立ちすくみたる、潯陽江頭、琵琶に泣く老婦の心にもたとへつべし。

葉鷄頭（榊原苔山筆）

藤棚に藤の葉の淺く黄ばみしも趣あり。臘梅の黄葉は、黄昏の

微光を得て、あはれいと深く、皀莢の細かき葉は、落花に異ならず。榎の落葉はそゞろに驛路の鈴響く街道の夕べを思はしむ。これ皆十一月の光景にして、この月、柿の葉紅に染まり、蔦の葉また赤し。

可憐の秋をなす

楓葉は菊花と並びて、可憐の秋をなすこと、いはずもあれ、公孫樹の黄葉また初冬十一月の美しき眺をつくる。ここに石榴の黄葉看來れば、その美敢へて公孫樹に劣るものならず。石榴の葉は柳の如く細かきが、晩風に誘はれて、紛々として雨の如く散り落つるや、滿地皆黄色となり、短き日の暮れはてて、常磐木の木蔭いち早く暗くなりゆくに、石榴の葉散りしく處のみ長く暮れやらねば、月の光照り添へるかと疑はる。この葉、池の水に散り積りて、朽ちたる藻を蔽ふ時は、いづれが水、いづれが岸とも見えわかず。敗荷・殘柳と相俟つて、蕭條たる池邊の廢趣いよ〳〵深し。

興常に新なれば

楓葉は搖落の殿をなすものなり。菊花凋み盡して、臘梅の蕾點點數へ來らんとする時、常磐木の蔭に木枯をよけては、極月なほ楓葉の枝にあるを見ることあり。されど冬至に及びて、あらゆる樹木いよ〳〵葉なきに至れば、菊は早くその切株に新綠の芽を生じ、水仙の葉また三四寸も伸びて、春風を待てり。園居年々景物相同じ。然れども看來つて、興常に新なれば、草木のよく人を幸ならしむること、蓋し黄金にも勝れりといふべきか。（斷腸亭雜稾）

坪内逍遙（つぼうちしょうよう）名は雄藏、劇作家、文學博士、岐阜縣の人、昭和十年歿、年七十七。

長柄堤　大阪市の北部を流れてゐた長柄川の堤。今は新淀川に合はされてしまつた。

四　長柄堤の訣別

坪内逍遙

晨鷄再び鳴いて殘月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや分れゆく横雲や、殘んの星を一つづつ、鐘が消しゆくいなのめの、長柄堤に秋たけて、一むら蘆に風黑く、有明凄き淀川水、逝きて歸らぬ浪の音、狹霧に咽せび白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、あはれはいとどまさるらん。片

茨木　今の大阪府茨木町。大阪市の東北方に當る。

討手　大野治長等の奸計によつて差向けられようとした討手。

伊豆守　石川貞政。治長の奸計を知つた貞政の手もとの兵が、義憤の餘り先んじて治長の邸に討入つたのである。

荒膽を拉ぐ

桐市正且元は、居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人寅の刻に邸を立つて、大阪城を後になし、列を正してしづ〳〵と、長柄堤にさしかかる。その時、市正手綱をひかへ、從兵を先へ進ませ、弟主膳正を呼び近づけ、改めていひけるやう、

遙道内坪

市「いかに弟、我昨日討手を待ち受け、自殺せんず覺悟なりしに、伊豆守が殘兵拔駈なし、討手の荒膽を拉ぎしため、備へありと見たがへしか、また寄せ來らん模樣もなく、あまつさへ夜に入りては、外にありし家臣まで、變を聞きつけ馳せ集まり、血氣のともがらこれに氣を得て、薪に油をそゝげる如く、弓鐵砲とひしめき騷ぎ、命をきかばこそ。うち捨ておかば、珍事に及

織田入道　織田信雄。信長の第二子。

君　豐臣秀頼。

隙を生ず

木村　木村長門守重成。

吉左右あらん

ばんも圖り難く、暫く彼等をなだめんため、一まづ茨木へ引退き、後事を圖らんとはいひしものの、昨夜ほのかに傳へ聞けば、織田入道も君を見限り、俄に京表へ退去の由、お家の危機いよ〳〵迫んぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に到らんこと必定なり。それにつき所存あつて、先刻今村三右衞門を木村が邸へ走らせたり。おつつけ三右が吉左右あらん、我はこれにて相待つべし。御身は暫く我に代り、手勢を差配し、途中に不慮の間違なきやう、一足先へ參るべし。

と言葉のうち、遙かにしたひ駈け來る足音。

主「あの足音は確かに今村。市「三右衞門か。今「我が君これに御座ありしか。長門樣にはおつつけこれへ。市「ほゝ大儀々々、滿足なるぞよ。然らば主膳は一足先へ、三右衞門もここ構はず、我はこれにて相待つべし。主「仰せではござりますれど、油斷ならざる

行き過ぐる　正しくは「行き過ぐ」。

遠樹模糊として幹を分ち

南山不落

當節がら、いかなる變事あらんも知れず。今「たゞ御一人この處に御座あらんは心もとなし。主「せめて我々、二人「兩人は。市「はていらぬ遠慮、氣遣ひ致すな。往け〳〵。主「ぢやと申して。市「はて往けと申すに。二人「はゝあ。

顔見合はせて是非なくも、主膳をさきに三右衞門、心殘して行き過ぐる。

後には何か一思案、寂然として駒立つる、長柄堤の有明方、ねぐらにさへづる小鳥の聲、川霧やう〳〵晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋昇る朝煙、くだかけの聲勇ましく、生氣溢るゝひんがしの、空には似ぬや入る方の、月すさまじき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し遠方に、おぼろ〳〵とあらはるゝ、名におほ阪の四衢八街、悄然として寂しげに、一棟高く聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬

故殿下　豐臣秀吉。

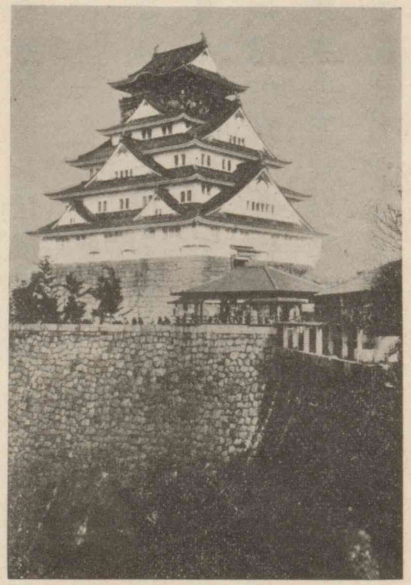
加藤肥州　加藤肥後守淸正。

阿附黨同して　大政所　秀吉の正室。

金城湯池

いすかの嘴とくひ違ひ

年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ〳〵、取分け加藤肥州逝去の後は、思慮あるものには堅節なく、義勇を存ずるものは才略乏しく、阿附黨同して相せめげば、大政所の御方さへ、當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有樣。唇齒既に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もそのかひなく、



大阪城（模造天守閣）

市「須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か情なや。この且元がすることなすこと、いすかの嘴とくひ違ひ、兩家を繫

千姫　徳川秀忠の長女で、家康の孫に當る。秀頼の室となつた。

前門の虎

不覺の涙に暮れけるが

ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の道火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が原となり、降つて湧いたる難題は、たゞ前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり、かゝる仕儀となつたること、御運の末といひながら、

こらへず馬より飛びくだり、かなたに向ひ平伏なし

市「これ、しかしながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠にかゝり、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日のしあはせ、不忠とも、いひがひなしとも思し召さん。それを思へば某が、この腸はちぎるゝばかり。つぐのひ難き不臣の罪は、あの世で御詫び仕らん。お宥しなされて下さりませ。

いますが如く兩手をつき、人目なければ、やゝ暫し、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

汗馬に宙を走り來る

御母公　秀頼の生母淀君。

市「あゝ、我ながら不覺の至、我が大罪の御詫よりも、さしかゝるお家の安危。長門守にはいかにせし、心もとなきことどもぢやなあ。

すかし眺むるをりこそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせずたゞ一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る、木村長門守重成。

木「市正殿に候な。　市「長門殿、待ちかねしぞ。

いふ間に駈け寄るくつわづら、右手に下り立ち顔見合はせ、言葉はなくてそゞろにも、まづ袖濡るゝ朝露や、風颯々たる枯柳の枝、入方の月ゆらめきて、老いゆく秋の寂しさを、長柄堤にとゞむらん。

木「もはや豐臣の御社稷も、いよ〳〵末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人・讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその間に、思ひがけぬ珍變あり。續いて足下に御討手と、昨朝承り大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸く

御母公の威を笠に被る

大野名は治長。

渡邊名は糺。

去就を定めざりし

が如く、織田入道殿日頃に似氣なく、激論の末席を蹴立て、たゞ今退座ありしとばかり、後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野・渡邊等が我意暴慢、この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと二たびまで、刀の柄に手は掛けしが、貴殿の日頃の教訓を、思ひいだして無念を忍び、無實と知つて忠臣を、救ひ得ざりしいひがひなさ。

悔むを且元おしなだめ、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねてもしば〳〵申せし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩のために命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこのたびの一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜんこと治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿既に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密

まつた

九度山今、和歌山縣高野山の北谷にある。

上田今の長野縣上田市。

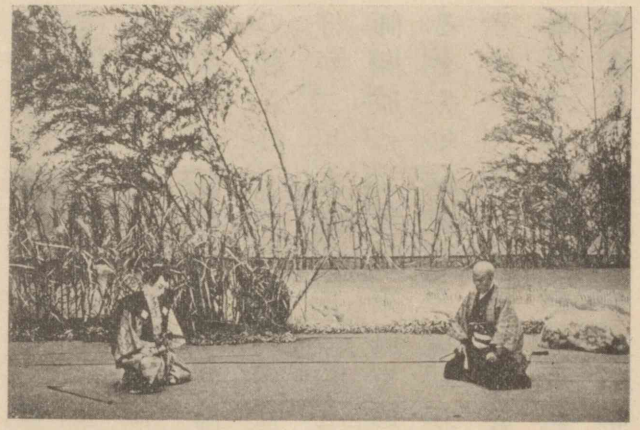
眞田安房守名は昌幸。

浪々なせし

悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた、大亂破裂せんは目前なり。この上はたゞ偏に、籠城の計畫こそ肝要なれ。　本「して、籠城の計畫とは、何をもつて先とすべきか。　市「されば、今御城に兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛將・勇卒にも事缺かねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備へをなしおきたり。　本「して、その智謀の將とは。　市「今、九度山に隱れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守が二男、左衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ、智勇兼備の良軍師、關原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世のさまを窺ひをるを、先年お身方となしおいたり。事起らば上使をもつて、急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は、一切かの人にまかせられよ。その他關原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、いづれも得易からぬ良將なるが、かねてちなみはつけおきたり。上、御使をもつて招かせられなば、心を傾け馳せ

紀州川　吉野川の下流をいふ。

参ぜん。これ第一の手配なり。木「してまた、籠城となつたる曉、敵を防がん手配は。市「その儀もかねて地利を考へ、出丸なくてはかなふまじと、前年紀州の山々より、材木數多伐りいださせ、商業のためと僞り、紀州川の川上より、浪速津に押流させ、御船入に積みおいたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひおきたる數萬俵の糧米あり。籠城數年にわたるといふも、なほ支ふるに餘りあるべし。木「それに加へて故殿下が、貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、なほ若干の餘財あり。市「甲冑・兵具も乏しから



長柄堤の有明方（舞臺面）

ときんば　利をくらはせ

速水　名は時之。
御宿　名は正倫。
和久　名は宗是。

金石もまた透りぬべし

ず。木「城は名に負ふ南山不落。市「眞田・後藤の智勇をもつて、この堅城に立籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、木「たとひ關東の老奸雄、利をくらはせ諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻め寄すとも、市「なか〳〵三年四年がほどには、攻め落さんこと難かるべし。木「まつた若年には候へども、いよ〳〵軍始まりなば、我また一方を承り、速水・御宿・和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹き飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石もまた透りぬべし。利慾に集まる關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰せに從ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配せん。御心安かれ、市正殿。市「ほゝ、頼もしし、頼もしし。たゞ大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら往時に照らし、成行く末を鑑みれば、木「淀の御

方の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。市「上、御發明にわたらせられど、木「讒佞これを蔽ふが故、市「地の利はあれども人の和なく、木「故太閤が御威武に、をのゝき震ひうち伏せし、六十餘州の民草も、市「天の時にや大御所の、おのづからなる德風に、いつしか靡く世の有樣。木「いかなればかくまでに、御運傾く西天の、市「有明の影薄れつゝ、木「東天紅と八面に、喧しく鳴くくだかけは、市「新日東天に昇るといふ、木「世の成行の、二人「影なるか。

大御所　德川家康。

愚痴にをちかた寺

是非もなき世の有樣と、入る方の月詠め入り暫しは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〴〵と明けにけり。

（桐一葉）

小山内薫（をさないかをる）劇作家、廣島市の人、昭和三年歿、年四十八。

五　演劇の鑑賞

小山内薫

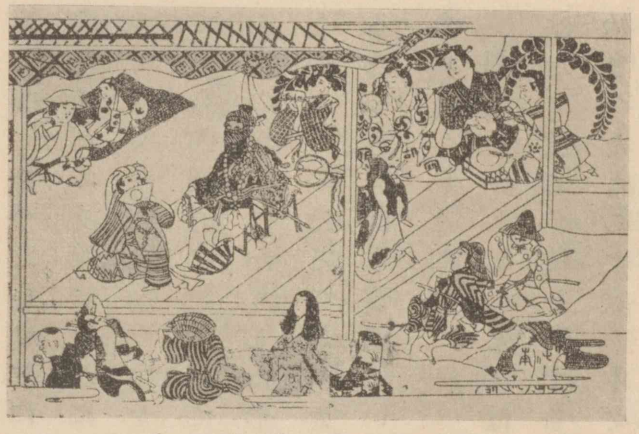
役者が見物人を前にして舞臺の上で技を演ずる、これが芝居即ち演劇である。原始時代には脚本（戲曲）らしいものはなかつた。

どこの國の演劇史を調べてみても、芝居の始りは舞踊或は默劇（無言劇）であつた。いづれにしても「詞」はなかつた。「身振」ばかりであつた。やがて次第にそれに詞が加へられて行つた。初は口立（くちだて）といつて、たゞ大體の筋だけを定めておいて、臺詞は役者が舞臺へ出てから即興的にいふのであつた。そのうちにだん〴〵脚本といふものが、しつかりした形をもつやうになつて來た。それ故芝居といふものは、その起源からいふと、動きが第一で、詞は第二である。即ち芝居は本質的にいふと、見るものであつて、聞くものではない。

即興的にいふ

劇場といふものも初はなかつた。舞臺は初からあつたが、それはたゞ「役者が技を演ずる場所」に過ぎなかつた。芝居は家の外で始まつたもので、家の中で生れたものではない。劇場をもつやうになつてからも、初は屋根がなかつた。園ひはあつても、青空の下

で演ぜられた。屋根が出來てからも、舞臺は見物席の中へ突き出てゐた。見物は三方から舞臺を圍んで芝居を見た。そのうちに幕といふものが出來て、舞臺と見物席とを仕切るやうになつた。今まで見物席へ突き出てゐた舞臺が、幕の後へ引つこんでしまつた。やがて舞臺に額縁が出來た。芝居はちやうど繪のやうに、その額縁の中へ納められてしまつた。舞臺の裝置がだん〳〵に進んで、まるで本物を見るやうになつた。

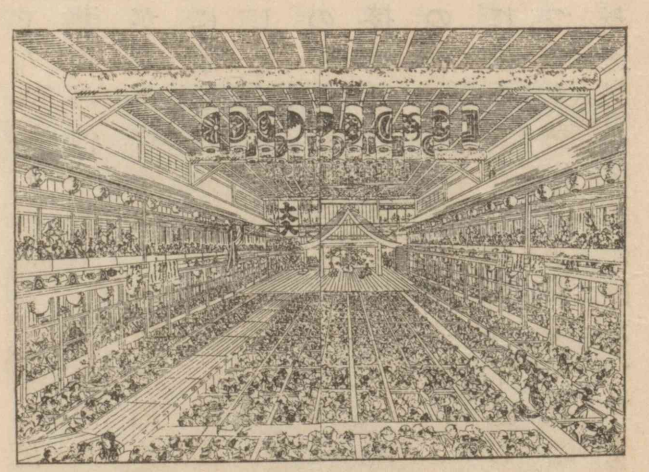


昔の舞臺（その一）

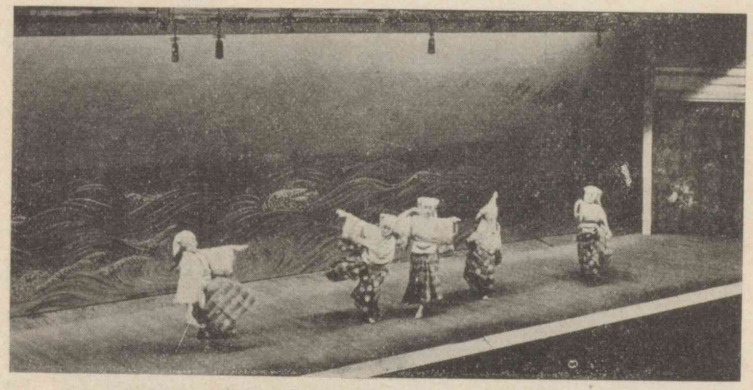
劇場に屋根のない時代は、芝居は晝間日光の下で演ぜられた。屋根が出來てから、だん〳〵夜演ぜら

れるやうになつた。芝居が夜演ぜられるやうになつてから、自然、舞臺照明の問題が起つた。そして油燈・瓦斯燈の單純な舞臺照明から、複雜で自由な電燈照明にまで進んだ。今日では照明の運用なしに裝置は考へられなくなつた。以上が世界を通じての演劇史の大要である。

芝居を構成するものは、最初は役者と舞臺と見物とであつた。役者と舞臺とがなければ、芝居の成り立たないことは誰にもわかう。しかし見物はゐなくとも、芝居は成り立ちさうに見える。とこ



昔の舞臺（その二）

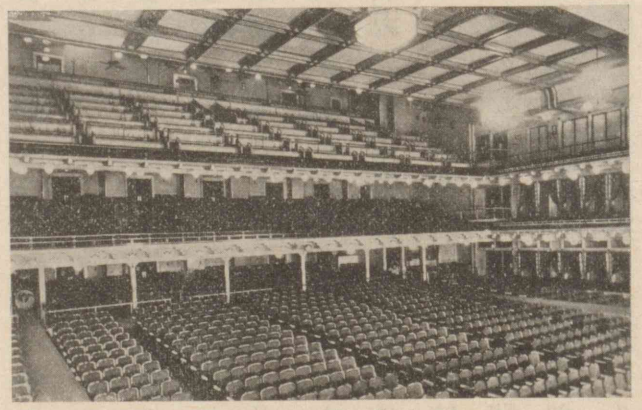


現代の舞臺

ろが、見物といふものがなければ、芝居は成り立たないのである。そこが芝居といふ藝術の他の藝術と違ふ點である。詩人が詩を作る、畫工が繪を描く。作者の外に讀む人、見る人がなくても、詩は詩として成り立ち、繪は繪として成り立つのである。ところが、芝居の場合では、直接感動を受ける見物といふものが目の前にゐなければ、それは一つの藝術にはならない。藝術の準備行爲にはなつても、藝術そのものにはならない。即ち「芝居の稽古」にはなつても、「芝居」そのものにはならないのである。芝

直接な感動の上に作り上げられる

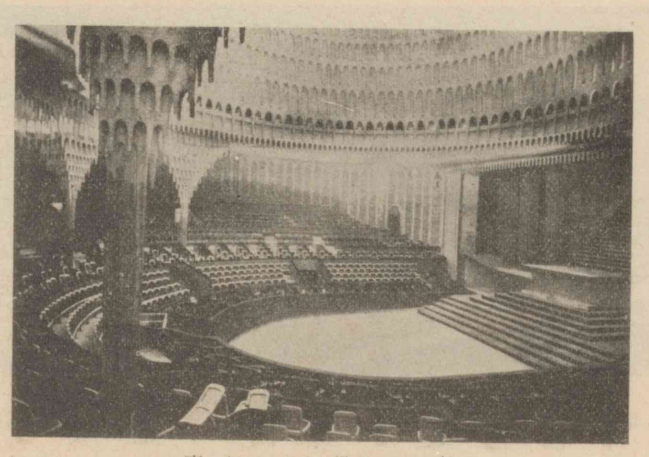
居といふものは、芝居と見物席との間に往來する直接な感動の上に作り上げられるもので、それなしに芝居といふものは成り立たないからである。それ故、原始時代に於ては、舞臺と見物席とは一つのものであつた。即ち兩方とも同じ平面の上にあつた。そのうちに舞臺が見物席より高い所に作られるやうになつたが、それでもまだ舞臺は見物席の中へ突き出てゐて、見物に取圍まれてゐた。近代になつて、幕が出來、額縁といふものが出來て、舞臺と見物席とが別々のものになつてしまつたが、これは芝居の本質から



現代劇場の見物席

いつて不自然なことなので、最近の西洋では幕が撤廢され、舞臺が再び見物席の中へ乘り出すやうな運動が起つて來た。

芝居の要素は、最初「身振」であつた、「動き」であつた。「詞」はそれより後に加はつた。それ故、芝居は「動き」が第一で、「詞」は第二であることは前に說いた。しかしこれは、演劇發達の徑路に於ける順序で、その要素としての價値の高下ではない。原始時代には、人間の實生活には「詞」がなかつた。或は「詞」が少かつた。思想の交換は手眞似や表情でなされた。それ故、人生の活寫である芝居にも「詞」がなかつ



新しい樣式の舞臺

圖はベルリンの劇場グローセリシャウシユビイルハウスの內部で、中央に白く見えるのが、見物席へ乘り出した舞臺である。

人生の活寫

た。「詞」が少かつた。ところが、人間の實生活に「詞」が潤澤になるにつれて、舞臺の上でも「詞」が豐富になつた。「詞」が芝居の重大な要素となるにつれて、脚本が大切なものになつて來た。初は口立乃至覺書に過ぎなかつたものが、文學として殘るやうになつた。しかも詩の最高形式として認められるやうになつた。西洋ではギリシヤ時代からの脚本が殘つてゐる。中世の宗教劇は脚本としてあまり價値のあるものを殘さなかつたが、エリザベス朝に及んで、イギリスは最も偉大なシェイクスピアを生んだ。降つてフランスのモリエール・ラシーヌ・コルネイユ、ドイツのレッシング・ゲーテ・シルレル、スペインのカルデロンなど、いづれも立派な脚本を殘してゐる。近代になつてノルウェーのイプセンが、いはゆる社會劇の基礎をつくつた。東洋でも印度や支那には隨分古い脚本が殘つてゐる。日本にも室町時代の能・狂言、元祿時代の淨瑠璃、江

エリザベス朝　エリザベス女王の在位の間。西暦一五五八年から一六〇三年まで。

シェイクスピア　西暦一五六四―一六一六年。

モリエール　西暦一六二二―一六七三年。

ラシーヌ　西暦一六三九―一六九九年。

コルネイユ　西暦一六〇六―一六八四年。

レッシング　西暦一七二九―一七八一年。

ゲーテ　西暦一七四九―一八三二年。

シルレル　西暦一七五九―一八〇五年。

カルデロン　西暦一六〇〇―一六八一年。
イプセン　西暦一八二八―一九〇六年。

戸時代末期の脚本などが古典として傳へられてゐる。

近代の演劇はもう脚本なしでは考へられなくなり、演劇鑑賞の第一義が脚本の内容を味はふことになつた。次に來るのは演出である。演出といふ詞は昔はなかつた。それは役者の演技・舞臺の裝置・照明・劇音樂・蔭の物音等すべての綜合から生れる劇的效果をいふのであつて、これを統率する者が演出家である。演出家といふものは昔はなかつた。たゞ一座の主立つた役者か、或は脚本の作者がその任に當つた。芝居といふものは銘々が勝手な事をしたのでは出來上らない。誰かが全體の統率調和を計らなければならない。その統率者が、近代になつて、役者でもない、作者でもない、一人の「演出家」として生れて來た。演出に就いてまづ第一に注意しなければならないことは、脚本の解釋である。演出家が脚本をどう解釋して、どこにどう力を入れたか、どこをどう扱つ

たかである。第二に注意しなければならないのは、その脚本の解釋が、いかに舞臺の上に表現せられたかである。この表現手段には、役者の扮裝・演技は勿論、舞臺裝置・舞臺照明・舞臺效果などのすべてが含まれる。それ故、看客はそれ等の一つ〳〵に注意しながら、同時にその綜合的效果を味はなければならない。

芝居は誰が見てもわかるものである。また誰が見てもわかるものでなければならない。しかも本當に芝居を味はふといふことは決して容易なことではない。小説を味はふとか、繪を味はふとかいふこと以上にむづかしいことである。芝居の鑑賞には素養と修錬とがいる。その代り、十分な素養と修錬とを經て、本當に芝居といふものがわかるやうになつたら、その興味は決して單なる小説や、單なる繪畫の比ではない。なぜといへば、芝居はすべての藝術の綜合であつて、しかも即刻直接に感動を受けること

が出來るものであるからである。「ハムレット」一卷を書齋で味はひ味はひ讀むとしたら、どうして一晩では足らない。しかもこれが劇場ではたゞ一晩で味ははれるのである。しかもその興味は到底書齋で讀書する比ではない。

胡桃の皮は堅い。演劇の鑑賞は生やさしいことではない。しかし堅い皮を割れば、必ずうまい實が得られるのである。

〔禁轉載〕
瀧澤馬琴（たきざはばきん）
名は解、江戸時代末期の作家、江戸の人、嘉永元年歿、年八十二。

犬塚番作
足利持氏の近習犬塚匠作の子。匠作は持氏の滅後、その遺子の傅となり、下野の結城氏に賴つたが、上杉氏に攻められて遺子に殉じ、番作は遁れて信濃に赴いた。

六　信乃の生立

瀧澤馬琴

犬塚番作が年來（としごろ）の志願漸く遂げて、寛正元年秋七月戊戌（つちのえいぬ）の日に男兒（おのこご）出生し、母も子もいとすくよかに、產室（うぶや）をさむる頃になりぬ。さて兒（ちご）の名を何とか呼ばん。」と女房手束（たつか）に語らへば、手束は暫くうち案じ、「世に子育てのなきものは、男兒ならば女の子とし、女の子には男名つけて養ひ育つれば恙（さが）なしとて、しかする人も稀

寛正
第百二代後花園天皇の御代。

世の僻事
信け難き筋

にはべり。我が夫婦に幸（さち）なくて、男兒三人（みたり）擧げしかど、皆みづ子にてなくなりたるに、このたびもまた男兒なれば、一入心弱くなりて、想ひやりのみせられはべり。この子が十五にならん頃まで、女の子にして育まば、恙（さが）あらじと思ひはべり。その心して名づけ給へ。」といふに、番作うちほゝゑみ、「死生命（しせいめい）あり、名の咎（とが）ならんや。物忌（ものいみ）多き世の僻（ひがこと）事、いと信け難き筋なれども、御身が心やりにもならば、世に從ふもわろきにあらず。古語に長きを『しの』といふ。我が子の命長かれと、祝（ことほぎ）の心もて、その名を信乃と呼ぶべきか。この名はいかに。」とまめだちて問へば、手束は聞きあへず「そはいとめでたき名

瀧澤馬琴

にはべり。」とて、これより信乃が衣裳を女服にせざるはなく、三四歳の頃に及びて、髫髪おくほどにもなれば、櫛ささせ、簪ささせて、「信乃よ〳〵。」と呼びしかば、知らざるものはこの兒を、女の子ならんと思ひけり。

されば墓六・龜篠は、このていたらくを見聞くごとに、掌拍ちて冷笑ひ、「凡そ人の親たるもの、男兒を擧ぐるを面目とせざるはなし。然るに武士の浪人が、女の子を願ふはいかにぞや。結城合戰に逃げおくれ、背疵受けしにいたく懲りて、軍といふもの夢にも見せじと思ひて、かくまで戲氣を盡すか。思ひしにます痴者なり。」と、さかしらだちて譏れども、相鎚はやすものはなく、なか〳〵に里人等は、信乃を愛して物をとらせ、かたみ代りに抱きとりて、その母の手を助けしかば、墓六夫婦はいとどしく、妬きこと限りなし。また羨ましく思へども、龜篠四十に餘るまで、子供一人もなかり

墓六　龜篠の夫。
龜篠　番作の姉。
さかしらだちて

しかば、夫婦しきりに談合して、ひたすら養女を索むるに、そが媒妁するものあり。煉馬の家臣某といふものの女兒、今年僅かに二歳になるを、生涯不通の約束にて養ひとり、濱路と名づけて、分に過ぎたる綺羅を飾らせ、やゝ東西を知る頃より、絲竹の技に師を擇みて、朝より夕べまで、うち囃し、舞ひ躍らせて、絶えて四隣を憚らず、萬づあだに養ひたつるに、生れ得たる顏ばせの、人なみなみに立ちまされば、鳶の子に鷹ありとて、女兒を譽むる陰言を、聞く二親はほゝゑみて、我を嘲るよしを曉らず、位高く富み榮えて、世に威德ある婿ならで、えこそはとらじと誇りけり。

それはさておき、番作が一子信乃は、はや九歳になりしかば、骨逞しく膂力ありげに尋常なる人の子が、年十一二になるものよりも、身の丈ひとかさ高かるに、なほ女服着せられて、雀小弓に紙鳶・印地打・竹馬なんど、萬づの遊も荒々しきまで、おのづから武藝を

煉馬　今の東京市板橋區練馬。當時、練馬平左衛門の所領であつた。
生れ得たる顏ばせ　鳶の子に鷹
絲竹の技

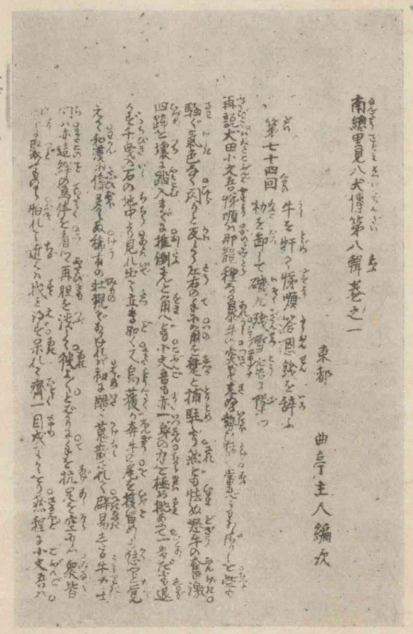
舌をふるふ

瀧の川　今の東京市瀧野川區瀧野川町。

岩屋詣で　今、瀧野川町にある金剛寺境内の洞中に安置された松橋辨天に詣でること。

好めば、番作ます〳〵鍾愛して、朝には里の總角と共に手習させ、夕べには儒書・軍記の句讀を授け、また或時は試みに劍術・拳法を教ふるに、もとより好む道なれば、その技の進むこと、親すらしばしば舌をふるひて、末頼もしく思ひけり。

さても信乃が生るゝ頃、母親手束が瀧の川なる、岩屋詣での歸るさに將て來つる狗の子は、信乃と共に大きくなりて、今年は既に十歳なり。この狗、背は墨より黑く、腹と四足は雪より白ければ、その名をやがて四白とも、また與四郎とも呼ぶほどに年來信乃によく狎れて、打ちたゝかれても怒ることなく、手に屬き、その意に隨ふにぞ、信乃は件の與四郎に索たづなをかけてうち乘れば、狗は主のこゝろを得て、足搔を早めて幾返りかす。この童子がていたらく、平人にはあらじとて、賞歎するも多かりけり。


南總里見八犬傳第八輯卷之一　東都　曲亭主人編次
第七十四回
八犬傳原稿

さるほどに、今年秋の頃よりして、手束は心地例ならず、病の床に臥ししより、鍼灸・藥餌の驗なく、冬の初に至りては、日に〳〵弱るばかりなれば、番作はいとどしく、眉うち開くよしもなく、夜とて安くはまどろまず。信乃はまた朝な〳〵、醫師がり往き來しつ、藥を進め、腰をさすり、四方山の物語して母の徒然を慰むるに、思はず涙目に滿ちて、やるかたなきを見る母は、胸ふたがりて泣顏を、隱すよしなく鳩尾を、撫でてつかへにまぎらかす。親子かたみに思ふこと、いはねどしるき孝行・慈愛、心ぞ想ひやられたる。

徒然を慰む

かたみに

かくてそのあけの朝、信乃は藥とりにとて、いそしく出で行きしが、冬の日なれば短くて、はや巳の頃になりしかど、常にもあら

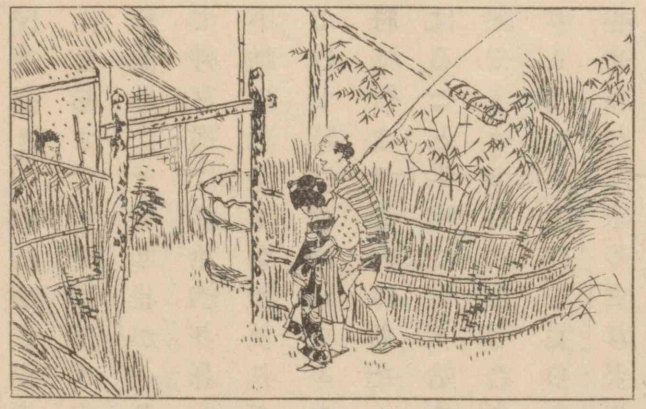
で信乃は還らず。彼、路草を食ふものにあらず、いかにしつらんと、子を思ふ親の心は落着かず。番作は外面へ出でて見んとて障子を開けば、思ひがけなく縁側に、藥のかよひ筥はあり。こはいぶかしと紐ときて、蓋かいとれば藥もあり。さもこそと片頬に笑みつつ、件の筥を携へて、いそがはしく内に入り「手束よ、藥はかしこにあり。いつのほどにか信乃は還りて、氣鬱を晴しに出でにけん、まことに童ごころぞかし。いかばかりおもしろきもの見かけてか、還りたるよしをも告げず、また出でたり。」といふに、手束はやゝおちゐて「たま〳〵のことなるに、必ずな叱り給ひそ。還るに程はあらじ。」と、いひつゝもその顔見ねば、片心にぞかゝりける。

おちゐて

片心にかゝる

かくてはや、末のあゆみ過ぎにけん、日影斜になる頃まで、待てども待てども信乃は還らず。よしや遊に耽れりとも、餓ゑなば興はも盡くべきに、物をも食はでいづこにをる。心得難きことなり。」と、

父すらいへば母はなほ、重き頭を幾たびか、擧げて眺むる外面に、板金剛の音すれば、それかとぞ思ふ、だまされて、人の足さへ恨みけり。妻がかこてば番作も、立つてみ、居てみ、待ちわびて、思はずも歎息し、「我が足むかしの如くならば、たゞ一走りに走りめぐりて、必ず索ねて將て還らんに、日影短き小六月、夕日を見つゝ杖にすがりて、いづちまで行かるべきさりとて暮れなばいよ〳〵便なし。巣鴨までも。」と一刀を、さして竹杖つき試み、はや外面に出でんとす。背戸の向ひなる百姓に、糠助と呼ばる



糠助と信乃（小村雪岱筆）

巣鴨　今の東京市豐島區巣鴨。

かゝるところに番作が背戸

るもの、右手に一條の釣竿と、一箇の魚籠を携へて、左手に信乃を扶け引き、いそがはしく詣來つゝ、今外面へ出でんとする番作と面をあはして、呵々とうち笑ひ、「犬塚氏か。秋の稼ぎもしはてたる骨休めにと我と我が、一日の暇を賜はり、今日は未明に浮れ出でて神宮川に雜魚釣り暮し、瀧の川を還り來れば、こなる息子が不動の瀧に水垢離執りて身は冷え徹り、息も絶ゆべき有樣を、見つけし時は膽潰れて、あわてふためき引きいだし、そがまゝ坊へ將て行きつ、藁火にあたゝめ、藥を服ませ、法師ばらもろ共に、いたはること半時ばかり、始めて我に復りしかば、湯飯もらうて腹を肥やさせ、事の故を尋ぬれば、母の大病平癒の祈禱に、水垢離をとりしといふ。十にも足らぬ童には、類稀なる大孝行、法師ばらも感心せられて、求めざれども當病平癒の神符・洗米を賜はりぬ。件の瀧は寺へ遠くて、我が外に人知らざりき。まことに危きことなり

神宮川　不明。
不動の瀧　瀧野川成就院の境内にある。

し。かくまで賢しき子なり、親なり、佛神見放ち給はんや。母御は本復疑なし。いざ子實を受取り給へ。暮れかゝれば、はや罷るなり。病む人によく心得てよ。要あらば背戸口から、竹螺鳴らして呼び給へ。わ子よ、明日は遊びに來よ、この魚炙りて食ませんに。」と、おのがいふことといひ誇り、人の挨拶聞きはてず、内にも入らで還りけり。

さてはとばかり番作は、我が子をほとり近く侍らし、「信乃、よくものを心得よ。孝行つくすも程あるものなり。身を危めて怪我あらば、親の歎きはいかなるべき。かくては孝が不孝ぞかし。親いとほしと思ふ子のためには、祈らでも神は守り給はん。」と諭せば、信乃は涙ぐみ、「宣ふところ心得はべり。今朝醫師がり赴きて、藥賜はりて還りしをり、家尊に家母のものがたり、信乃が命の長かれと、勿體なくも我が母は、命を贄に神々へ祈らせ給ひし驗にや、長きいたづきに臥し給ふと、宣はせしを立聞きて、悲しきこと限りは

本復疑なし

いたづきに臥す

べらず。涙に濡るゝ片袖を、泣聲立てじとかみしめて、縁側についゐたりしが、親の願望驗あらば、我が願望も驗ありなん。いかでこの身を贄にして、母の命に代らんと思ひ定めつ、もてかへりし藥をそこにそと置きて、年來母の信じ給ふ、瀧の川に走り行き、岩屋の神に思ふこと、繰返したる瀧の絲、心強くも身をうたし、ひとたびは死にはべりけん、その後のこと知らずはべり。さてあるべきにゆくりなく、糠助男に妨げせられて、活きて還るは願望を、神は受けさせ給はぬにや。いと口をしく悲しくはべり。」と、いひかけて目を押拭へば、手束はよゝと泣き沈み、「世に子をもたぬ親はなけれど、今日死するとも我が身ばかり、幸あるものはなきぞとよ。八九歳のをさな心に、賢しや親に代らんと、祈る誠を神明の、受け給へばこそ瀧壺の、水屑とならで還りけめ。かくまでに命運強き我が子の上を見るからに、行末さへに賴もしく、歡ばしさに涙のみ、

ゆくりなく

命運強き

はふれ落ちてとゞめ難し。母が御身に代らんとて、祈りしは惑なり。驗あるべきことならぬに、返す〳〵もよしもなき願立なし給ひそ。」と、涙の隙に諭しけり。

（南總里見八犬傳）

涙の隙に諭しけり

僧正遍昭（そうじょうへんぜう）　俗姓名は良岑宗貞、寛平二年寂、年七十五。

在原業平（ありはらのなりひら）　元慶四年歿、年五十六。

小野小町（をのの こまち）　歿年不詳。

七　古今調と新古今調

古今集より

僧正遍昭

蓮葉（はちすは）のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

在原業平

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからましし

小野小町

大江千里
歿年不詳。

紀貫之
天慶九年歿、年六十五。

凡河内躬恆
歿年不詳。
住の江
今の大阪市住吉區の邊の古稱。

紀友則
延喜五年歿、年六十一。

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

大江千里

月見ればちゞにものこそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

紀貫之

夏の夜のふすかとすればほとゝぎす鳴く一聲にあくるしののめ。

凡河内躬恆

住の江の松を秋風吹くからに聲うちそふる沖つしら。なみ。

紀友則

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散る

壬生忠岑
康保二年歿、年九十八。

坂上是則
歿年不詳。

伊勢
天慶二年歿。

藤原俊成
元久元年歿、年九十一。
井出
今の京都府井手町の邊。

らん

壬生忠岑

山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ

坂上是則

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れるしら雪。

伊勢

さ月來ば鳴きもふりなんほとゝぎすまだしきほどの聲を聞かばや

新古今集より

藤原俊成

駒とめてなほ水かはんやまぶきの花の露そふ井出の

藤原定家　俊成の子、仁治二年歿、年八十。

藤原家隆　嘉禎三年歿、年八十。

藤原良經　建永元年歿、年三十八。

藤原雅經　承久三年歿、年六十二。

玉川

おほ空は梅の匂にかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月　藤原定家

明けばまた越ゆべき山の峰なれや空ゆく月の末のしら雲　藤原家隆

雲はみな拂ひはてたる秋風を松にのこして月を見るかな　藤原良經

みよし野の山の秋風さよふけてふるさと寒く衣うつなり　藤原雅經

藤原實定　建久二年歿、年五十三。

西行法師　俗姓名は佐藤義清、建久元年寂、年七十三。今の大阪市住吉區の邊。

寂蓮法師　俗姓名は藤原定長、建仁二年寂。

式子内親王　後白河天皇の皇女、建仁元年薨。

宮内卿　後鳥羽天皇の宮女、承元元年歿。

なごの海の霞の間よりながむれば入日を洗ふ沖つしら波　藤原實定

古畑の岨の立木にゐる鳩の友よぶ聲のすごきゆふぐれ　西行法師

さびしさはその色としもなかりけり眞木たつ山の秋の夕暮　寂蓮法師

山深み春とも知らぬ松の戸にたえ〳〵かゝる雪の玉水　式子内親王

宮内卿

うすく濃き野邊のみどりの若草に跡まで見ゆる雪のむら消え

藤岡作太郎

八　歌人西行

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧、その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉・室町の世「そも〳〵歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。」といはれし時、稱讃の聲また定家に讓らず、近世に至つて定家の價値いたく墜落したれども、「山家集」の一書は、なほいかなる歌人の机邊をも去らず、西行の名、今に嘖々たるは、そも〳〵何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清鎭守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武をもつて家を立て、義清また勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽天皇に仕へて北面の

藤岡作太郎　號は東圃、國文學者、文學博士、金澤市の人、明治四十三年歿、年四十一。

そも〳〵歌道云々　室町時代の歌僧正徹の隨筆「徹書記物語」に見える語。

藤原秀郷　田原藤太と稱した。平安時代中期の武人、天慶の亂に功があつた。歿年不詳。

鳥羽天皇　第七十四代。

士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機に就いては、或は傳へていはく、かつて同族左衛門尉憲康と同行して、鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參朝せんとて、約に從ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騷ぎ、内には泣き悲しむ聲聞ゆ。あやしと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死し給へり。」とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、「恩を棄て無爲に入る」は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の

西行（佐々木尚文筆）

明日を期して別る

恩を棄てて云云　「清信士度人經」に見える語。

歸れるを喜びてとりすがれるを、思ひきりて緣より下に蹴落し、「これこそ愛着の絆を斷つ初ぞ。」と、顧みもせで家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髪せりと。かくて名を西行または圓位といふ。出家せる時保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて、高野に籠り、吉野に隱れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、それより筑紫にまでも遊べり。常にいへらく、「桑門に家なし、抖擻して身を終るべし。」と。一蓋の笠、一條の杖草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺これをにくみ、弟子に告げていはく、「遁世の身ならば、一すぢに佛道修行の外、他事あるべからず。數寄を立ててここかしこに嘯きありく條、憎き法師なり。いづこにても見あひたらば、頭をうち割るべし。」と。その後高尾の法華會に行脚の僧の參りあひて、花の蔭などながめ歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ。」と問へば、「西行と申す者。」といふ。文覺手ぐすねを引き、望のかなひつる體にて、明障子を開けて出づ。暫しまもりて、「年頃承り及びたるに、御たづね悦び入り候。」とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちは、いかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、このていたらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、「日頃の仰せに違ひたるは。」とあやしみ問ふ。文覺答へて、「あら、いひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面樣か。文覺をこそ打たんずるものなれ。」といへりとぞ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて、詠じていはく、

願はくは花のもとにて春死なんそのきさらぎの望

愛着の絆を斷つ
嵯峨　今の京都市右京區嵯峨。
保延　第七十五代崇德天皇の御代。
右幕下　右近衛大將源頼朝。
大師　弘法大師。
高尾　今、京都市右京區梅ヶ畑高尾町にある神護寺。古義眞言宗大覺寺派。
文覺　俗姓名は遠藤盛遠。神護寺を再興した。
嘯きありく
手ぐすねを引く
まもる
ていたらく
いひがひなの法師

雙林寺　今、京都市下京區圓山鷲尾町にある。天台宗。

建久　第八十二代後鳥羽天皇の御代。

宗祇　飯尾氏、室町時代の連歌師、文龜二年歿、年八十二。

應仁　第百三代後土御門天皇の御代。

月の頃

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はずたるもの卽ち「山家集」なり。

建久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集め

我が國古來詩人多しと雖も、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅かに三人、西行・宗祇・芭蕉これなり。

西行これが魁をなし、宗祇は應仁亂離のをりをも厭はず、西行に私淑してその跡を逐ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乘じて、また西行・宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、

宗祇

正風の眼を開く

一期を劃す

詩人の吟囊を肥やす

小天地に跼蹐して

實情を欺く

宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おのおのその道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥やすものなるかを知るべし。

そも〳〵平安朝の貴紳・淑女は、賀茂・桂二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ小天地に跼蹐して、足畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなかりければ、隨つて思想の發展あることなし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外は知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想・辭句の上にも、おのづから典型を生じて、天眞を忘る。實情を欺き、虛僞に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その內容は空しく、滔々

風を成す

自然が隱微の聲を聞く

崇德天皇
保元の亂後、讃岐國に流され給ひ、同國で崩御あらせられた。

斷腸の響
己が肺腑より出づ

自然の堂奥に入る

として風を成せる時、西行ひとり蹶起して、從來踏襲の典型を簸却し、みづから山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安朝の末、崇德天皇の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠じ給へる事の、世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫々として、天成の大才と許さるゝこと、またむべならずや。

西行既に古來の典型を捨てて、直ちに自然の堂奥に入らんとす。深く山川・草木を愛して、これを視ることなほ己れを視るが如く、同情の念に堪へざるはもとより然るべきことなり。

わきて見ん老木は花もあはれなりいまいくたびか春にあふべき

うちつけに

眞如の月

機に從つて轉ず

ここにまた我が住みうくてうかれなば松はひとりにならんとすらん

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり。すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。

おのづから花なき年の春もあらば何につけてか日を送らまし

うちつけにまた來ん秋の今宵まで月ゆゑをしくなる命かな

愛着は迷なり、この雲を去らざれば、眞如の月は明らかなり難しと雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず。これを窓前日夜の友とす。淸淡虛無、一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に從つて轉ずること水の如し。來往自在、ここに疑懼の境を去つて、安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ安く待ちつゝけふもくらさん

雲にたゞ今宵の月をまかせてん厭ふとてしもはれぬものゆゑ

西行の歌は企てて成すものにあらずして、おのづから成れるなり。そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

斧鑿の痕なし

ながむるに慰むことはなけれども月を友にてあかす頃かな

今よりは昔がたりは心せんあやしきまでに袖しをれけり

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹き來つて松濤すなはち鳴る。その聲必ず自然を離れず、平易率直を旨とすれども、風すさまじければ鳴ることもまた強し。時に婉曲の響あれども、ことさらに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歲の下いよ〳〵光を增して、後人をして渴仰やまざらしむ。

天籟吹き來つて松濤すなはち鳴る

渴仰やまざらしむ

（國文學全史平安朝篇）

九　日記と隨筆

阿佛尼

一　出　立

頃は、み冬立つはじめの定めなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絕えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事にふれて心ぼそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、行き憂しとてもとゞまるべきにもあらで、何となくいそぎ立ちぬ。目かれせざりつるほどだに荒れまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、慕はしげなる人々の袖のしづくも慰めかねたる中にも、侍從・大夫などのあながちにうち屈したるさま、いと心ぐるしけれ

阿佛尼（あぶつに）
鎌倉時代中期の文學者、歌人、弘安六年寂。

み冬立つはじめ
建治三年十月。

侍從
藤原爲相。

大夫
同爲守。大夫は五位の稱。侍從と共に阿佛尼の子。

いひこしらふ

ば、さま〳〵いひこしらへぬ。

二　都がへり　　紀貫之　　（十六夜日記）

十一日。雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさしのぼるに、東の方に山の横ほれるを見て、人に問へば、八幡の宮といふ。これを聞きて喜びて人々拜み奉る。山崎の橋見ゆ。嬉しきこと限りなし。ここに相應寺のほとりに、暫し舟をとゞめて、とかく定むることあり。この寺の岸ほとりに柳多くあり。或人この柳の影の、川の底にうつれるを見て詠める歌、

さゞれ浪よするあやをば青柳のかげのいとして織るかとぞ見る

十六日。今日の夕つ方、京へのぼるついでに見れば、山崎の小櫃の繪も、糰餅の法螺の形もかはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。必

十一日
承平五年二月。
八幡の宮
今、京都府八幡町の男山に鎭座する官幣大社石清水八幡宮。
山崎
今の京都府乙訓郡大山崎村。
相應寺
山崎の橋の西にその址があるといふ。
島坂
今の京都府向日町の南方にある小坂。
あるじす

急ぎしもせぬ

ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、歸る時ぞ人はとかくありける。これにもかへりごとす。

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬほどに、月出でぬ。桂川月の明きにぞ渡る。人々のいはく、「この川、飛鳥川にもあらねば、淵瀨更に變らざりけり。」といひて、或人の詠める歌、

ひさかたの月におひたるかつら川そこなる影もかはらざりけり

また或人のいへる、

天ぐものはるかなりつるかつら川そでをひでてもわ渡りぬるかな

また或人詠める、

かつら川わがこゝろにも通はねどおなじ深さになながるべらなり

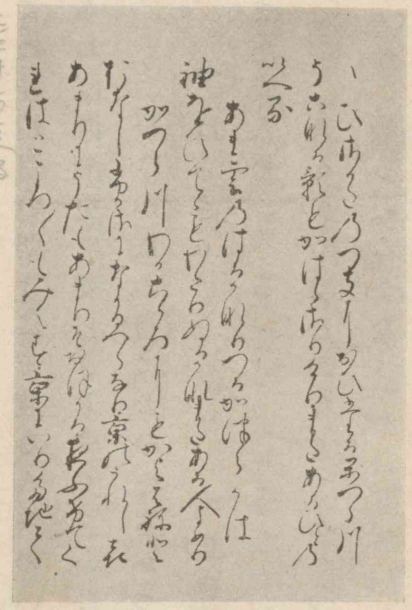
いへる

袖をひづ

ながるべらなり

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜ふけて、ところどころも見えず。京に入りたちて嬉し。家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもましてい、ふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなり。さるは、たよりごとに、物も絶えず得させたり。今宵かゝることと、聲高にものもいはせず、いとはつらく見ゆれど、志はせんとす。

さて池めいて、窪まり水づけるところありぽとりに松もあり



土佐日記古寫本

さるは

いとはつらく見ゆれど

き。五とせ六とせのうちに、千とせや過ぎにけん、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。おほかたのみな荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく、思ひこしきがうちに、この家にて生れし女子の、もろ共に歸らねば、いかゞは悲しき。舟人もみな子抱きてのゝしる。

かゝるうちに、なほ悲しみに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものをわが宿に小松のあるを見るがかなしさ

とぞいへる。なほあかずやあらん。またかくなん、

見し人を松の千とせに見ましかば遠くかなしきわかれせましや

忘れ難く、口をしきこと多かれど、えつくさず。

（土佐日記）

いかゞは悲しき

心知れる人

かくなん

えつくさず

清少納言（せいしやうなごん）　平安時代後期の才媛。清原元輔の女。第六十六代一條天皇の皇后定子に仕へた。歿年不詳。

さらなり

まいて

つとめて

つきづきし

三　春は曙

清少納言

春は曙。やうゝしろくなりゆく山ぎは、少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏はよる。月の頃はさらなり、闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、烏の寢どころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと、蟲のねなど、いとあはれなり。

冬はつとめて。雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜などのいとしろく、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃・火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

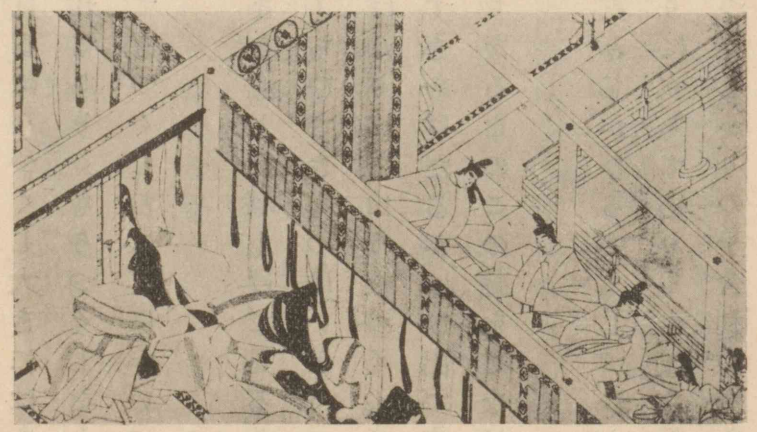
へに　綜緒（へを）にの意。綜緒は鷹の脚に結びつける紐。

尼にそぐ　頸のあたりで髪を切つて、切下髪にすること。

たすきがけにゆひたる　襷は袴についたもので、それを背から胸へかけて結ぶのである。

四　うつくしきもの

瓜に書きたるちごの顔。雀の子の、ねずなきするに躍り來る。またへにつけて居ゑたれば、親雀の蟲などもて來てくゝむる、いとらうたし。三つばかりなるちごの、急ぎてはひ來る道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびに捉へて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたるちごの、目に髪のおほひたるを、かきはやらで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひた



枕草子繪卷

腰のかみ　袴の腰の上方。
さうぞく

かり　あひるのこと。

る腰のかみの、白うをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごの、あからさまに抱きてうつくしむほどに、かいつきて寢入りたるもらうたし。

雛の調度。蓮の浮葉のいとちひさきを、池より取上げて見る。葵のちひさきも、いとうつくし。何も〳〵ちひさきものは、いとうつくし。いみじう肥えたるちごの、二つばかりにて白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣長くて、たすきあげたるが、はひ出で來るも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文讀みたる、いとうつくし。

鷄の雛の足高に、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよひよとかしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親のもとにつれだちありく、見るもうつくし。かりの子。舍利の壺。な

紫式部　平安時代後期の才媛。藤原爲時の女。一條天皇の中宮彰子に仕へた。歿年不詳。

須磨　當時、源氏は須磨の配所にゐた。

心づくしの秋風　「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり」（詠人不知、古今集）

行平　在原業平の兄。寛平五年歿、年七十六。

關吹きこゆる　「旅人は袂涼しくなりにけり關吹きこゆる須磨の浦風」（續古今集）

でしこの花。

一〇　須磨の浦波

紫式部

（枕草子）

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、「關吹きこゆる」といひけん浦波、よる〳〵はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、皆うちやすみわたれるに、ひとり目をさまし給ひて、枕をそばだてて、四方の嵐を聞き給ふに、浪たゞここもとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴を少しかき鳴らし給へるが、我ながらいとすごう聞ゆれば、彈きさし給ひて、

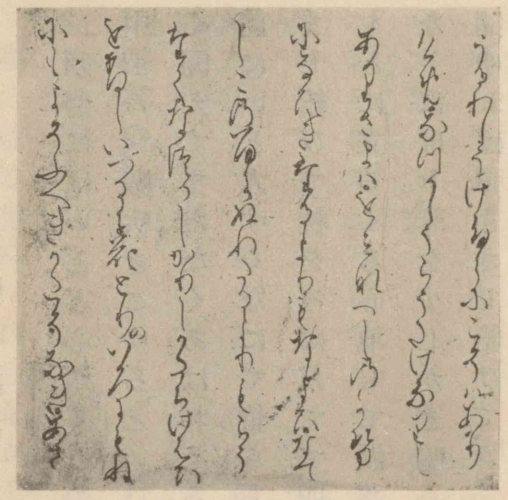
こひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風
や吹くらん

あいなう

げにいかに云云　以下源氏の心を述べてゐる。

心細しと云々　御側に仕へる人々も。

と謠ひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれで、あいなう起きゐつゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。



源氏物語古寫本

げにいかに思ふらん。我が身一つにより、親はらからをも別れ、片時だに立去りがたく、程につけつゝ思ふらん家を離れて、かく惑ひあへると思すに、いみじくて、我がかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらんと思せば、晝は何くれとたはぶれ言うち宣ひ紛らはし、つれ〴〵なるまに、いろ〳〵の紙を繼ぎつゝ、手習をし給ふ。めづらしきさまなる唐の綾などに、さま〴〵の繪どもをかきすさび給へる屏風の

千枝　傳不詳。

常則　飛鳥部常則。「榮華物語」にもその名が見えてゐるが、傳はやはり不詳である。

作繪　墨繪の上に更に彩色をすること。

心もとながり　御側に仕へる人々が。

世に知らず聞ゆ

おもてなど、いとめでたく見どころあり。人々の語り聞えし海山の有樣を、遙かに思ひやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、になく書き集め給へり。この頃の上手にすめる千枝・常則など召して、作繪仕うまつらせばやと、心もとながりあへり。

懷かしうめでたき御有樣に、世の物思忘れて、近う馴れ仕うまつるを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろ〳〵咲き亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、たゝずみ給ふ御さまの、ゆゝしう淸らなること、所柄はましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかなる御衣、紫菀色など奉りて、こまやかなる御直衣に、帶しどけなくうち亂れ給へる御さまにて、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆるらかに讀み給へるめでたさ、また世に知らず聞ゆ。沖より、船どもの謠ひのゝしりて漕ぎ行くなども、ほのかに聞えて、たゞちひさき鳥のうか

べると見やらるゝも、さま〳〵心細げなるに、雁の連ねて鳴く聲、楫の音に紛へり。うちながめ給ひて、御涙のこぼるゝをかき拂ひ給へる御手つきの、黑木の御數珠にはえ給へるは、ふるさとこひしき人々の心地、みな慰みにけり。

年かへりて、日長くつれ〴〵なるに、植ゑし若木の櫻もほのかに咲きそめて、空の氣色うらゝかなるに、よろづの事思し出でられて、うち泣き給ふをり〳〵多かり。二月二十日あまり、いにし年、京を別れし時、心苦しげなりし人々の御有樣などいとこひしく、南殿の櫻は盛りになりぬらん、一とせの花の宴に、院の御けしき、內のうへのいと清らになまめいて、我が作れる句を誦じ給ひし御有樣なども、思ひ出で聞え給ふ。

いつとなく大宮人のこひしきに櫻かざししけふも來にけり

院　源氏の御父桐壺院。
內のうへ　今上朱雀院。

筆能隆原藤慎　卷繪語物氏源

大殿の三位中將　源氏の北の方であつた故奏上の兄で、源氏の親友。

こひしく云々　源氏を。思しなりて

山賤めきて云云　源氏の裝束を述べたのである。

しなして

いとつれ〴〵なるに、大殿の三位中將は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世の覺え重くてものし給へど、世の中いとあはれに味氣なく、物のをりごとにこひしく覺え給へば、事の聞えありて罪にあたるとも、いかゞはせんと思しなりて、俄にまうで給へり。うち見るより、めづらしく嬉しきに、一つ涙ぞこぼれける。住まひ給へるさま、いはん方なく唐めきたり。所のさま、繪にかきたらんやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから、めづらかにをかし。山賤めきて、ゆるし色の黃がちなるに、青鈍の狩衣・指貫うちやつれて、殊更に田舍びてもてなし給へるしもいみじう、見るに笑まれて淸らなり。取使ひ給へる調度も、かりそめにしなして、御座所もあらはに見入れらる。碁・雙六・彈棊の盤などやうのもの、田舍わざにしなして、念珠の具どもいとめづらしきさまにしつゝ、行ひ勤め給ひけりと見えたり。

所につけ

物まゐれるさまなど、殊更所につけ、興ありてしなしたり。海士どもあさりして、かひつ物もて參れるを、召出でて御覽ず。浦に年經らんさまなど問はせ給へば、さま〴〵安げなき身の愁を申し出でつゝ、そこはかとなくさへづるも、心のゆくへは同じことなるかなと、あはれに見給ふ。御衣どもかづけさせ給ふを、生けるかひありと思へり。

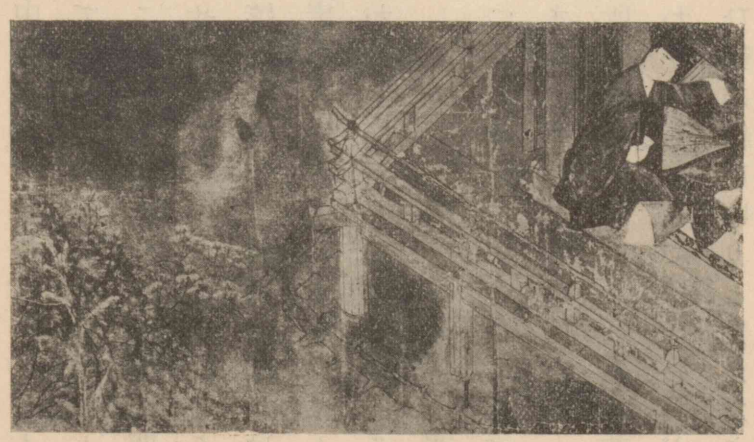
浦に年經らんさまなど云々　源氏が海士に問うたのである。

生けるかひありと云々　海士は。

御馬ども云々　中將が。

飛鳥井　「飛鳥井に宿りはすべし影もよしみもひも寒しみまくさもよし」（催馬樂）

御馬（みうま）ども近う立てて、見やりなる倉か何ぞなる、稻ども取出でて飼ふなど、めづらしう見給ふ。「飛鳥井」少し



源氏物語繪卷

若君　源氏の長子である夕霧。中將からは甥に當る。

大臣　中將の父で、源氏の舅。若君からは祖父に當る。

語り給ふに　中將が。

堪へ難く云々　源氏は。

醉の悲しび云云　白居易の詩句に「醉悲淚を灑ぐ春杯の裏。吟苦頤を支ふ曉燭の前。」とある。

あかなく

謠ひて、月頃の御物語、泣きみ笑ひみ聞え給ふ。若君の何とも世を思さでものし給ふ悲しさを、大臣（おとど）の旦暮（あけくれ）につけて思し歎く事など語り給ふに、堪へ難く思したり。盡きすべくもあらねば、なかなか片端もえまねばず。夜もすがらまどろまず、文など作り明かし給ふ。さいひながらも、物の聞えをつゝみて、急ぎ歸り給ふ。いとなかなかなり。御土器（かはらけ）まゐりて、「醉の悲しび淚そゝぐ春の盃のうち」と諸聲（もろこゑ）に誦じ給ふ。御供の人ども皆淚を流す。おのがじしも、遙かなる別れ惜しむべかめり。朝ぼらけの空に、雁つれてわたる。あるじの君、

ふるさとをいづれの春か行きて見んうらやましきは歸るかりがね

宰相、更にたち出でん心地せで、

あかなくにかりの常世（とこよ）をたち別れ花のみやこに道

九條武子（くじょうたけこ）
歌人、京都市の人、昭和三年歿、年四十二。

理智の燈炬を高くかざして盲愛の闇路より出づ

やまどはん
さるべき都の苞（つと）など、よしあるさまにてあり。
（源氏物語）

一　心の落葉

九條武子

一　理智と情操

日本婦人の最も讃美すべき特長は、豊かに恵まれたその情操である。そして日本婦人に最も望ましいものは理智である。

理智の光のない愛は盲目に終る。理智の燈炬（とうこ）を高くかざして、始めて盲愛の闇路より出づることが出來る。しかし理智のみの生活は、たとひ愛を解しても、みづから愛に充たされることは出來ない。

我等の愛は、理智の導きによつて、正しい成長を求めなければならない。そしてこれを永く撫育してゆくものは、おのづからに

して鍛へ上げられた情操に他ならない。理智に明らかにして、しかも濃やかな情操を保持するところに、よき均衡と、調和された豊かな生活が展かれる。

二　許しあふ心

心に願ふすべてのものに恵まれてゐても、心から信じ、許しあふまことの友は、求め得難いものである。

互に信じあふことの出來るのは、互の人格を敬愛しあふからである。互の人格を信じ、心から許しあふことの出來るのは、同じ信念の世界に於て、限りない愉悦を抱きつゝ、共に歩んでゐるからである。

九條武子

今日の社交と名づけられるものは、單なる追從と美辭の交換に過ぎないのは、悲しいことである。花を見て花の心に觸れぬ、この寂しさの中に見出した、まことの友こそ、何にもまして尊いものである。

自然の寵兒

三　虛僞の美

自然のすがたには、何人も反感をもたない。それは徒に飾られた詐がないからである。

梅も百合も、さては名もない野の花も、自然の寵兒は、みづからに惠まれた個性を、すなほに發揮してゆくところに、みづからの生命を愉躍し、そしてよく他と調和して、自然界の平安な美を保つてゐる。

本眞を忘れる

しかし人生の美を分擔してゐる女性は、徒に裝飾を俟つて、作られた美を顯さうと努める。本眞を忘れて、技巧を弄するところに、痛ましい美の混亂が生じて來る。

本眞に逆らふ虛僞の美より醜いものはない。

四　不滅の仕事

生命を打ちこんだ仕事

生命を打ちこんだ自分の仕事をもつてゐる人は、その仕事のどんな種類であるにかゝはらず、何人も尊敬せずにはをられない。たとひその一生に成し遂げ得ずとも、永遠に滅びることのない生命が、そこに見出される。

たけ子の部屋にいけた白百合を二月にあふれは遠方人にあふる心地す

九條武子染筆

私たちは、許された短い生命を惜しまねばならぬ。しかし多くの人たちは、單に限られた生命の延長のみを希ひ、限りない生命

を育むことを忘れがちである。千古の教を垂れた古への聖者たちや、藝道の上に不滅の光を放つた古人の努力を見るにつけても、短い生命を育て上げることの尊さが感ぜられる。

自分の生命を打ちこむことの出來る仕事をもつてゐるものは幸福である。そこにいかなる苦難が押寄せようとも、絶えざる感謝と新しい力のもとに生きてゆくことが出來る。

生命は仕事と共に不滅である。

暗い影にをのゝく

五　眠に入る時

その日の仕事を終へて、眠に就かうとする時、靜かに一日中の自分を回想してみる。一日の營みに疲れた自分を、もう一度呼返してみる。それは涙ぐましいほど懷かしいものである。

何の思ひわづらふこともなく眠に就く時は嬉しい。快い回想のうちにも、ともすれば暗い影にをのゝく自分を見出す時は、限

りない寂しさに襲はれずにはをられない。

自分をしみ〴〵と省みることは、つゝましく生きる合掌である。私たちは、絶えざる懺悔を通して、丹念に生活してゆきたい。そして何の憂もなく平安な眠に入りたいと思ふ。

（無憂華）

えうなきもの

八橋

今の愛知縣知立町の東の邊にあつたと傳へられる。

一二　東下り

昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき國もとめんとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくも手なれば、橋を八つ渡せるによりてなん八橋とはいへる。その澤のほとりの木の蔭におりゐて、飯（かれい）くひけり。その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て或人のい

はく「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心を詠め。」といひければ、詠める、

唐衣きつゝ馴れにしつましあればはるゝきぬる
旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人、餉の上に涙落して、ほとびにけり。行き〳〵て駿河國にいたりぬ。宇津の山にいたりて、我が入らんとする道は、いと暗う細きに、蔦かづらはしげり、もの心細く、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かゝる道にはいかでかおはする。」といふに、見れば、見し人なり

在原業平（織田觀潮筆）

ほとびにけり

すゞろなるめ

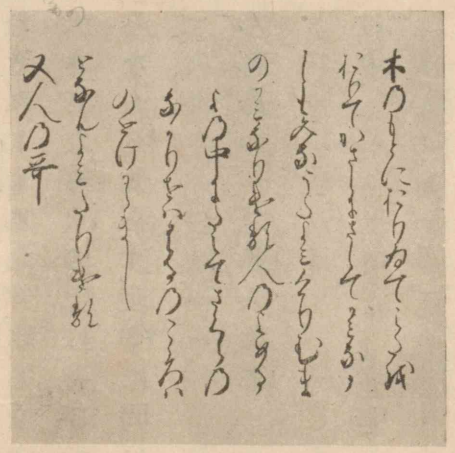
けり。京にその人の御許にとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時しらぬ山はふじの嶺
いつとてかかのこまだらに雪の降るらん

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは鹽尻のやうになんありける。なほ行き〳〵て武藏國と下總國とのなかに、いと大きなる河あり。それを隅田河といふ。その河のほとりにむれゐ



伊勢物語古寫本

て思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守、「はや舟に乘れ。日も暮れなん。」といふに、乘りて渡らんとするに、みな人もものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚とあかき、鳴の大きさなる、水の上に遊びつつ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人え知らず。渡守に問ひければ、「これなん都鳥。」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

（伊勢物語）

一三　隅田川

ワキ詞「これは武藏國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ、人々を渡さばやと存じ候。またこの在所にさる仔細あつて、大念佛を

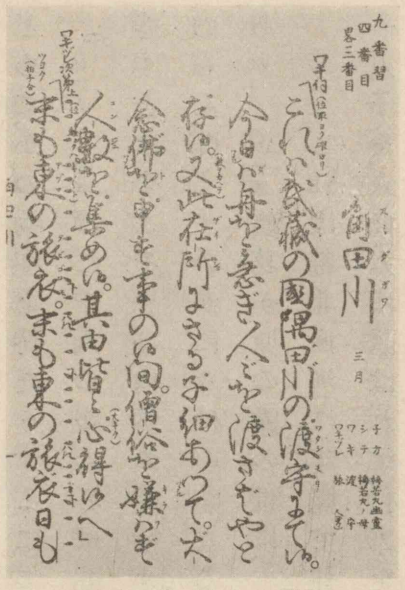
僧俗を嫌はず

ツレ　旅人。

ワキ　渡守。

申すことの候間、僧俗を嫌はず、人數を集め候。その由皆々心得候へ。

ツレ次第謠「末も東の旅衣、日も遙々の心かな。詞かやうに候ものは、都のものにて候。我、東に知る人の候ほどに、かのものを尋ねて、たゞ今罷り下り候。道行雲霞あと遠山に越えなして、幾關々の道すがら、國々過ぎて行くほどに、ここぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く着きにけり。詞急ぎ候ほどに、これははや隅田川の渡りにて候。またあれを見れば、舟が出で候。急ぎ乘らばやと存じ候。いかに船頭殿、舟に乘らうずるにて候。ワキ詞「なか〳〵のこと。



隅田川謠本

召され候へ。まづ〳〵御出で候あとの、けしからず物騒に候は、何事にて候ぞ。ツレ詞「さん候、都より女物狂の下り候が、是非もなくおもしろう狂ひ候を見候よ。ワキ詞「さやうに候はば、暫く舟をとどめて、かの物狂を待たうずるにて候。

シテサシ一聲謠「げにや、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人に言づてて、行方を何と尋ぬらん。聞くやいかに、うはの空なる風だにも、地謠「松に音する習あり。シテ謠「眞葛が原の露の世に、地謠「身を恨みてや明け暮れん。

シテ謠「これは都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外に一人子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ねて迷ふなり。下歌地謠「千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを。上歌もとよりも、契假なる一つ世の、そのうちを

シテ　狂女。梅若丸の母。

人の親の云々　「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」（藤原兼輔、後撰集）

聞くやいかに云々　「聞くやいかにうはの空なる風だにも松に音する習ありとは」（宮内卿、新古今集）

北白河　今、京都市左京區の內。

だに添ひもせで、ここやかしこに親と子の、四鳥の別れこれなれや。尋ぬる心のはてやらん、武藏國と下總の中にある、隅田川にも着きにけり。

シテ詞「なう〳〵我をも舟に乘せて給はり候へ。ワキ詞「おことはいづくよりいづ方へ下る人ぞ。シテ詞「これは都より人を尋ねて下るものにて候。ワキ詞「都の人といひ、狂人といひ、おもしろう狂うて見せ候へ。狂はずは、この舟には乘せまじいぞとよ。シテ詞「うたてやな、隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ、舟に乘れとこそ承るべけれ。謠かたの如くも都のものを、舟に乘るなと承るは、隅田川の渡守とも覺えぬことな宣ひそよ。ワキ詞「げに〳〵都の人とて、名にし負ひたる優しさよ。シテ詞「なう、その詞はこなたも耳にとまるものを。かの業平もこの渡りにて、謠名にしおはばいざこと問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと。詞なう舟人、あ

四鳥の別れ　鳥の子四羽が各巢立つて別れようとするのを、母鳥が送つて悲鳴したといふ故事。「孔子家語」に見える。

おことと

乘せまじいぞとよ　うたてやな

れに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。（ワキ詞）あれこそ沖の鷗候よ。（シテ詞）うたてやな、浦にては千鳥ともいへ、鷗ともいへ、などこの隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。（ワキ謠）げに〳〵誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、（シテ謠）沖の鷗と夕波の、（ワキ謠）昔にかへる業平も、（シテ謠）ありやなしやとこと問ひしも、（ワキ謠）都の人を思ひ妻、（シテ謠）わらはも東に思ひ子の行方を問ふは同じ心の、（ワキ謠）妻をしのび、（シテ謠）「子を尋ぬるも、（ワキ謠）思は同じ、（シテ謠）こひ路なれば、（上歌地謠）我も

狂　女

舟ぎほふ云々
「ふなぎほふ
堀江の川のみ
なぎはに來ゐ
つゝ鳴くは都
鳥かも」（大伴
家持、萬葉集）
さりとては

構へて

また、いざこと問はん都鳥、我が思ひ子は東路に、ありやなしやと問へども、答へぬは、うたて都鳥、鄙の鳥とやいひてましげにや、舟ぎほふ堀江の川の水際に、來ゐつゝ鳴くは都鳥、それは難波江これはまた、隅田川の東まで、思へば限りなく遠くも來ぬるものかな。さりとては渡守、舟こぞりて狹くとも、乘せさせ給へ渡守。さりとては乘せてたび候へ。（ワキ詞）かゝる優しき狂女こそ候はね。急いで舟に乘り候へ。この渡りは大事の渡りにて候。構へて靜かに召され候へ。（ツレ詞）なう、あの向ひの柳のもとに、人の多く集まりて候は、何事にて候ぞ。（ワキ詞）さん候、あれは大念佛にて候。それにつきてあはれなる物語の候。この舟の向ひへ着き候はんほどに語つて聞かせ申さうずるにて候。（語）さても去年三月十五日、しかも今日に相當りて候。人商人の都より、年のほど十二三ばかりなる幼きも

奥　奥州。

前世のことにてもや候ひけん

のを買ひ取つて奥へ下り候が、この幼きもの、いまだ習はぬ旅の疲にや、もつての外に違例し、今は一足もひかれずとて、この川岸にひれ伏し候を、なんぼう世には情なきものの候ぞ、この幼きものをば、そのまゝ路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間、この邊の人々、この幼きものの姿を見候に、由ありげに見え候ほどに、さま〴〵にいたはりて候へども、前世の事にてもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく、いかなる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、我は都北白河に、吉田の何某と申しし人のたゞ一人子にて候が、父には後れ、母ばかりに添ひまゐらせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになりゆき候。都の人の足手影も懐かしう候へば、この道のほとりに築きこめて、しるしに柳を植ゑて賜はれと、おとなしやかに申し、念佛四五遍唱へ、終にこと終つて候。なんぼうあはれなる物語にて

逆縁ながら

候ぞ。見申せば、船中にも、少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて、御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が着いて候。疾う〳〵御あがり候へ。（ッレ詞「いかさま今日はこの所に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。

（ワキ詞「いかにこれなる狂女、何とて舟よりは下りぬぞ。急いであがり候へ。あら優しや、今の物語を聞き候ひて、落涙し候よ。なう急いで舟よりあがり候へ。（シテ詞「なう舟人、今の物語はいつのことにて候ぞ。（ワキ詞「去年三月、今日のことにて候。（シテ詞「さてその兒の年は、（ワキ詞「十二歳。（シテ詞「主（ぬし）の名は。（ワキ詞「梅若丸。（シテ詞「父の名字は。（ワキ詞「吉田の何某。（シテ詞「さてその後は、親とても尋ねず、う。（ワキ詞「思ひも寄らぬこと。（シテ謠「なう親類とても、親とても、尋ね來ぬこそことわりなれ。その幼きものこそ、この物狂が尋ぬる

言語道斷のこと

目の前のうき世

子にて候へとよ。なうこれは夢かや、あらあさましや候。ワキ詞「言語道斷のことにて候ものかな。今まではよそのこととこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや。あら痛はしや候。かの人の墓所を見せ候べし。こなたへ御出で候へ。シテ謠「今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今はこの世になき跡の、しるしばかりを見ることよ。さても無慙や、死の縁とて、生所を去つて東のはての、道のほとりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや。地謠「さりとては人々、この土をかへして、今一度この世の姿を母に見せさせ給へや。上歌「殘りてもかひあるべきは空しくて、あるはかひなきはゝき木の、見えつ隱れつ面影の、定めなき世の習、人間憂の花盛り、無常のあらし音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲おほへり。げに目の前のうき世かな。

鳧鐘　鉦鼓のこと。

子方　梅若丸の亡靈。

ワキ詞「今は何と御歎き候ひてもかひなきこと。たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御弔ひ候へ。謠「既に月出で川風も、はや更け過ぐる夜念佛の時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らしすゝむれば、シテ謠「母はあまりの悲しさに、念佛をさへ申さずして、たゞひれ伏して泣きゐたり。ワキ詞「うたてやな、餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれと、謠「鉦鼓を母にまゐらすれば、シテ謠「我が子のためと聞けばげに、この身も鳧鐘を取上げて、ワキ謠「歎きをとゞめ、聲澄むや、シテ謠「月の夜念佛もろ共に、ワキ詞「心は西へと一すぢに、シテ、ワキ謠「南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛。地謠「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謠「隅田川原の波風も、聲たて添へて、地謠「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謠「名にしおはば、都鳥も音を添へて、子方、地謠「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

シテ詞「なう〳〵、今の念佛のうちに、まさしく我が子の聲の聞え候。この塚の内にてありげに候よ。ワキ詞「我等もさやうに聞きて候。所詮こなたの念佛をばとゞめ候べし。母御一人御申し候へ。シテ謠「今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子謠「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、地謠「聲のうちより、幻に見えければ、シテ謠「あれは我が子か。子謠「母にてましますかと、地謠「互に手に手を取りかはせば、また消え〳〵となりゆけば、いよ〳〵思はます鏡。面影もまぼろしも、見えつ隱れつするほどに、東雲の空もほの〴〵と明けゆけばあと絶えて、我が子と見

あれは我が子か

えしは塚の上の、草茫々として、たゞしるしばかりの淺茅が原となるこそあはれなりけれ。

（觀世流謠曲）

一四　芳賀矢一先生の尊靈の御前に

芳賀矢一　國文學者、文學博士、昭和二年歿、年六十一。

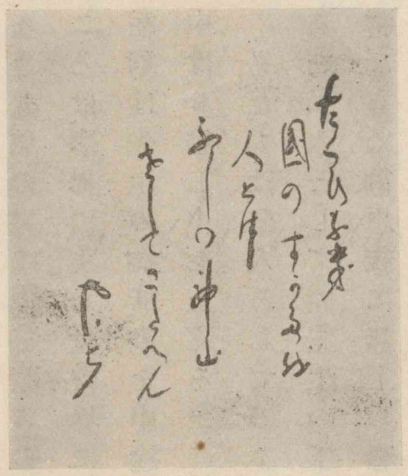
諒闇の天　當時は大正天皇の諒闇中であつた。

謹みて故芳賀矢一先生の尊靈の御前に申し上げます。

昭和二年二月六日、曉の風寒き午前四時四十分、先生は天壽盡き、溘焉として現實（このよ）をお去りになりました。恩師と仰ぎ、慈父と慕ひ奉る私どもも、もはや再び先生の優しき御顏を拜し、溫かき御言葉に接し、親しく厚き御教訓と、懇なる御指導と、深き御暗示とを仰ぐことは出來ません。淋しい諒闇の天はいとど淋しくなりました。冷たき二月の心は一入冷たくなりました。今にして先生が、私どもの靈の力であり、光であらせられたことを痛感させられます。

先生が我が國文學界にお出でになりましたことは、實に我が國文學界に限りなき惠でありました。獨り過去に於ける惠であつたばかりでなく、先生を失つた現在に於ても、將來に於ても、また同じく惠であるに相違ありません。國文學の研究に西洋科學の方法を採り入れて、國文學の特質を闡明し、我が傳統の精神に科學の精神を調和し、これを統一して、新なる國學を建設する事に、なされました先生畢生の御努力は、實に我が國民の永久に忘却すべからざる、偉大なる御功績を遺されました。かつて先生の御教を仰ぎ、先生の御唱道を聽き、先生の御指導を受けた私どもは、各その趨ふところに就いて、先生の御業を紹ぎ、先生の御志を成さうと奮勵致してをります。先生の築かれました基礎の上に、國學の新建設と國文學の新研究とは、着々としてその成果を見つゝあるのであります。今や國文學の價値は汎く社會の認むる

たくひなき國のすがたを人とはゝふしの神山さしてこたへん　やいち



芳賀矢一筆蹟

ところとなり、專攻學者は年を逐うて多數に上り、斯學空前の盛觀を呈するに至りましたのは、これ全く先生の御開拓の賜物であります。先生は明治以來の國文學界の先輩であらせられたばかりでなく、なほ永遠に消ゆることなき國文學界の光であらせられると固く信ずるのであります。

同時に、先生は我が國語教育界にもまた不滅の偉業を遺されました。小學國語讀本は實に先生の御力によつて眞の我が國語讀本になつたと申しても、誰もこれを否定することは出來ません。その他御著述に、御講演によつて、直接・間接になされました御指導の功は、我が國民の銘記するところであります。

世の常ならぬ

講筵に列する

先生は御生前よく「自分はもう學問に教育に、成し得べきすべてを成し盡したものであるから、もう長く生きてゐる要はない。」と述懷せられました。私どもはこの御言葉に接するごとに、限りなき悲愁の思に胸を閉ぢられました。私どもの先生に期待することは、學界にまた教育界にまだ多々ありますのに、不幸にして宿痾は先生の御活動を中途に封じてしまひました。先生の御胸中は、お察し申し上ぐるだに、實に涙の種であります。

私どもは公人としての不朽なる御功績を仰ぎ稱ふると共に、また私人としての先生の玉の如き御人格に無限の愛慕と、世の常ならぬ御恩義に無上の感謝とを捧げるものであります。寛容と溫情とは、先生の御性格の最も美しい一面でありました。かつて大學に於ける先生の御講筵に列し、先生の御薫陶に浴した私どもは、一身上に就いてまでも、一方ならぬ御愛顧・御指導を受け

膝下に走る

再生の惠に浴する

故あること

たことを忘れることが出來ません。かゝることにまで、先生の溫情に甘えて、事多き御身を煩はし奉つたことを、今更勿體なく思はずにはをられません。それにもかゝはらず、先生はいかなる場合にも懇切に御教導を下さいました。故に公私に關して深い苦惱・煩悶を抱いたものは、先生の膝下に走つて、先生の御手にすがりました。そして先生の溫情に再生の惠に浴したものも決して一二にはとゞまりません。私どもの先生を慕ひ仰ぐことの深いのも、まことに故あることであります。思ひがけなき先生の訃報を得て、驚きと悲しみとで、私どもはたゞ茫然として、親に別れたやうでありました。直ちに先生の門に走り、先生の御亡骸の前にひれ伏しましたが、もとのまゝなる平和な御顏にも、もはや溫かい血の色を拜することは出來ません。柔しき御口にも、もはや御聲を聞くことは出來ません。これまで濫りに先生の寛大に甘え、

先生の恩情を煩はし奉つたことが、そゞろに後悔されます。受けた海山の御恩に對して、報い奉つたもののあまりに少かつたことが愧ぢられます。せめては心ゆくばかりお詫び申さうにも、今はそれすらかなひません。何と悲しいことでありませう。先生の廣い御心は、これをしもお恕し下さいませうか。

さりながら先生、先生の偉大なる御精神は、深く私どもの精神にしみこんでをります。先生の君國に對する忠愛の熱火は、常に私どもの魂を燃やしたててをります。先生の健實なる學風は、強く私どもの愛慕するところであります。私どもはこの精神、この情熱、この學風をもつて、先生の御遺志を紹ぎ、先生の御遺業を成すことに全力を竭すをもつて、報恩第一の道と致すことをお許し下さいませ。またお遺しになりました令息令孃方は皆俊秀にいらせられ、御家門のこと、外から介意することは更にありませんが、もし萬々一私どもの微力を捧ぐる機會がありますならば、せめてそれを鴻恩に報い奉る一つの道と致したいと存じます。この無禮な微意をもどうかお許し下さいませ。

先生、現實ではかうしてお別れ致します。しかしながら先生、先生はいつまでも私どもの精神の力であつて下さいます。生命の光であつて下さいます。さうして永久にお別れすることのない師弟であつて下さいます。

昭和二年二月十二日　東京帝國大學門下生總代　藤村作

忠愛の熱火

微力を捧ぐ

なめげな

藤村作（ふぢむらつくる）　國文學者、文學博士、福岡縣の人、明治八年生。

李白（りはく）　支那唐代の詩人。

白帝城　今の四川省夔州府（きしうふ）にある。

江陵　今の湖北省荆州府江陵縣。

一五　唐詩抄

早（つと）に白帝城（はくていじやう）を發す
朝（あした）に辭す白帝彩雲の間（かん）。
千里の江陵（かうりよう）一日に還る。

李白

杜甫　支那唐代の詩人、李白と並び稱せられた。
管鮑　管仲と鮑叔牙。いづれも支那春秋時代の人。
杜牧　支那唐代の詩人。
張繼　支那唐代の詩人。
楓橋　江蘇省蘇州城外にある。

兩岸の猿聲啼いて住まらざるに。
輕舟已に過ぐ萬重の山。

貧交行　杜甫

手を翻せば雲と作り手を覆せば雨。
紛々たる輕薄何ぞ數ふるを須ひん。
君見ずや管鮑貧時の交。
此の道今人棄てて土の如し。

山行　杜牧

遠く寒山に上れば石徑斜なり。
白雲生ずる處人家有り。
車を停めて坐に愛す楓林の晚。
霜葉は二月の花よりも紅なり。

楓橋夜泊　張繼

姑蘇　今の蘇州。
孟浩然　支那唐代の詩人。
柿本人麻呂　藤原の宮時代の朝臣、歌人、歿年不詳。
知んぬ

月落ち烏啼いて霜天に滿つ。
江楓の漁火愁眠に對す。
姑蘇城外の寒山寺。
夜半の鐘聲客船に到る。

春曉　孟浩然

春眠曉を覺えず。
處々啼鳥を聞く。
夜來風雨の聲。
花落つること知んぬ多少ぞ。

一六　萬葉集抄

近江の荒都を過ぎし時　柿本人麻呂

玉だすき　畝火の山の　橿原の　ひじりの御代ゆ

おもほしめせか

霧れる

山部赤人（やまべのあかひと）　奈良時代の朝臣、歌人、歿年不詳。

生（あ）れましし　神のことごと　樛（つが）の木の　いやつぎつぎに　天の下　しろしめしをし　天（そら）に見つ　大和をおきて　青丹よし　奈良山を越え　いかさまに　おもほしめせか　天ざかる　鄙にはあれど　いはばしる　近江の國の　さゝなみの　大津の宮に　天の下しろしめしけむ　すめろぎの　神のみことの　大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここといへども　春草の　茂く生ひたる　霞たつ　春日の霧（き）れる　百敷の　大宮どころ　見ればかなしも

反歌

さゝなみの志賀の辛崎さきくあれど大宮人の船まちかねつ

不盡山（ふじのやま）を望みて　山部赤人

ふりさけ見れば

和銅元年戊申　天皇御製歌（元明天皇）

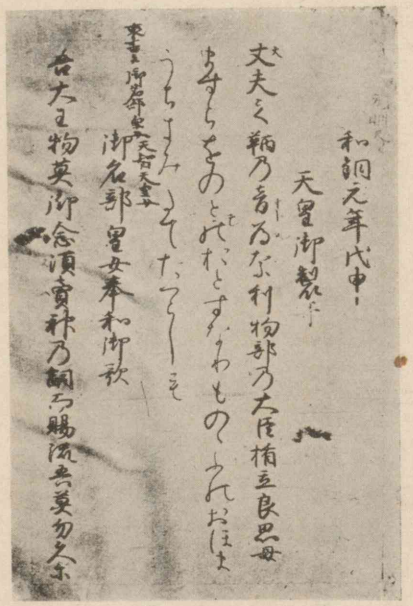
ますらをのとものおとすなりものゝふのおほうちきみたてたつらしも

御名部皇女奉和御歌

わかおほきみものなおもほしすめかみのつきてたまへるあれなけなくに

田兒の浦　今の靜岡縣富士川口東方一帶の海濱。

天地（あめつち）の　分れし時ゆ　神（かむ）さびて　高く貴き　駿河なる　不盡の高嶺を　天の原　ふりさけ見れば　渡る日の　影も隱ろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行き憚り　時じくぞ　雪は降りける　かたり繼ぎ　いひ繼ぎ行かむ　不盡の高嶺は



萬葉集古寫本

反歌

田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪はふりける

山上憶良（やまのへのおくら）
奈良時代の朝臣、歌人、歿年不詳。

高市黒人（たけちのくろひと）
藤原の宮時代の歌人、歿年不詳。

安禮の崎
今の靜岡縣濱名湖附近の海岸。

長忌寸意吉麻呂（ながのいみきおきまろ）
藤原の宮時代の朝臣、歌人、歿年不詳。

子等を思ひて　山上憶良

瓜食めば　子どもおもほゆ　栗食めば　ましてしぬばゆ　いづくより　きたりしものぞ　まなかひにもとなかゝりて　やすいしなさぬ

反歌

しろかねも黄金も玉も何せむにまされるたから子にしかめやも

いづくにか船泊すらむ安禮の崎漕ぎ廻（た）み行きし棚なし小舟　高市黒人

大宮の内まで聞ゆ網引（あびき）すと網子（あご）とゝのふる海人の呼聲　長忌寸意吉麻呂

志貴皇子（しきのみこ）
第三十八代天智天皇の皇子、靈龜二年薨。

大伴旅人（おほとものたびと）
奈良時代の朝臣、歌人、天平三年歿、年六十七。

香椎
今の福岡縣糟屋郡香椎村。

高橋蟲麻呂（たかはしのむしまろ）
奈良時代の朝臣、歌人、歿年不詳。

笠金村（かさのかなむら）
奈良時代の朝臣、歌人、歿年不詳。

鹽津山
滋賀縣の北端にある山。

湯原王（ゆはらのおほきみ）
志貴皇子の御子、薨年不詳。

いはばしる垂水（たるみ）の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも　志貴皇子

いざ子ども香椎の潟に白妙の袖さへぬれて朝菜摘みてむ　大伴旅人

千萬のいくさなりとも言擧（ことあげ）せず取りて來ぬべき男（をのこ）ぞ思ふ　高橋蟲麻呂

鹽津山うち越え行けば我が乘れる馬ぞつまづく家こふらしも　笠金村

湯原王

夏實の河　吉野川の一部の名。

大伴坂上郎女　旅人の妹、歿年不詳。

大伴家持　奈良時代の武將、歌人、旅人の子、延曆四年歿。

今奉部與曾布　奈良時代の下野國の防人、歿年不詳。

吉野なる夏實の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

大伴坂上郎女

ぬばたまの夜霧の立ちておほゝしく照れる月夜の見れば悲しさ

大伴家持

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも

今奉部與曾布

今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は

新村出　言語學者、文學博士、靜岡縣の人、明治七年生。

捉はれた題詠

人麻呂の挽歌　天智天皇の皇女明日香皇女の薨ぜられた時に作つた長歌の中の句である。

明星の明くる朝は　山上憶良が、天逝したその子古日を慕うて作つた長歌の中の句である。

一七　星夜讃美の女性歌人

新村出

代々の歌集を繙いて誰しも感ずるのは、和歌に星夜の美を歌つてないことである。叙景詩としてでなく、抒情詩としての七夕の歌の如きは、日本が盛唐の文學や風俗の影響を受けた後、「萬葉」以來の歌に幾千と數へてよいか知れぬほどあるが、もと〳〵捉はれた題詠であつて、清新の味に乏しいものばかりだ。曉や宵の明星は稀に詠まれた。「萬葉」の長歌にも、朝夕東西に位置をかへて人の眼につくこの金星をあしらひに使つたのが二首もある。その一は、卷二の人麻呂の挽歌で、「夕星のか行きかく行き」とあり、その二は、卷五の雜歌に、「明星の明くる朝は」と「夕星の夕べになれば」との二句を對句にしてある。人麻呂の星の歌には、構想上おもしろい、幼稚ながら壯大な比喩的な歌がある。卷七雜歌に詠天と題

して、

天の海に雲の波立ち月の船星の林にこぎかくる見ゆ

と詠んだのがそれであるが、詩としては感心せぬ。

朝日のかゞやき、夕映のけしき、それはともあれ、朧月夜を若くものなしとまでたゝへ、秋の夜の月はいふもさらなり、四季をりをりの月の吟詠は無數であるのに、星夜の美をたゝへたのはおろか、星々を詠んだ歌はごく〳〵少い。平安朝末期から鎌倉時代にかけては、星の歌はやゝ眼について來るが、それ以來でも夕星が十首ほど、北斗七星が數首ほか見出せぬ有樣である。單に明星を詠んだのは、まだ一つくらゐしか知らぬ。しかし院政時代あたりから鎌倉中期頃までの歌には、まづ和歌史のうちでは絶唱と見るべきものがちらほらある。殊に定家の作や、爲家以下その子

朧月夜を云々「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」（大江千里、新古今集）

爲家　藤原定家の子。建治元年歿、年七十八。

孫の作中に、誦すべきものが割合に多い。星の歌とか寄星祝とかいふやうな題で詠んだ作歌が、まゝ家集などにあらはれてゐるが、詩的價値の乏しいものばかりだ。そのうち應永年中、冷泉家の爲尹（ためたゞ）が詠じた寄星祝の歌

くもりなく空にみちたる光かな星の林の夕闇のそら

の如きはいい方である。定家の作には左の三首がある。

星のかげ西にめぐるも惜しまれて明けなんとする春の夜の空

そよくれぬ楢のひろ葉に風おちて星いづる空の薄雲のかげ

冬の木の霜もたまらぬ山風に星の光のまさりがほなる

應永　第百代後小松天皇の御代。

爲尹　應永二十四年歿、年五十七。

まさりがほ

季節々々の星の氣持がよくあらはれてゐる。

源家長の左の一首は、定家の春の夜の明けるを惜しむ情緒とかはらぬ星にあこがれた名吟である。

夏みえし星の光ぞかくれゆく秋たつ夜半の長きは

じめに

夏の夜な〳〵見なれた星々を西天に送るのは、何だか心さびしい妙な氣分になるものだ。牧夫星座の大角（だいかく）のみ遙かあなたに輝き、北冠は淡くなり、織女・牽牛の兩星が頭上からあちらへそれてしまひ、北十字星てふ白鳥が向きをかへて、見つけた私たちの眼を迷はす。その代り七人娘の昴（すばる）がだん〳〵高くなり、その後から牡牛のまなこを光らすアルデバアランがついて來るのが、日暮れて間もなく見られるのが樂しみである。

星月夜といふ言草（いひぐさ）は、一體月夜をもとにして、星夜を形容した

源家長　鎌倉時代の歌人。歿年不詳。

大角　牧夫星座の首星アルクトウルスの漢名。

北冠　北冠星座。圓形に並んだ星座である。

北十字星　白鳥星座中の星で、十字形をなしてゐるもの。天の河の中にある。

七人娘の昴　「すばる」はプライアデスの和名。その寄り集まつた七つの星をギリシヤでアトラス神の子である七人の娘に擬人してゐる。

アルデバアラン　牡牛星座の首星。赤色をなしてゐる。

文句で、ちと氣にくはぬところもあるが、まんざら棄てた名前ではない。散文では「今昔物語」に出てゐるのが最も古いから、平安朝中期このかたの新語であらう。歌には肥後と呼ばれた女性歌人が、永久四年の百首、いはゆる「次郎百首」に星と題して詠んだ名歌が一番早い。後世よく人が引く作である。

我ひとり鎌倉山を越えゆけば星月夜こそうれしかりけれ

まことに純直な歌である。暗い夜と鎌倉とをかけた詞の綾があつても、まづ星夜の賞美として、すらりと出來たよい歌といつて差支へない。肥後は、肥後守實成といふものの女で、勅撰集中に作歌も多く載せられ、別に「肥後集」といふ家集も存する。それ等一時代數十年ほどを經て、高倉天皇の中宮建禮門院に仕へた右京大夫といふ女房に、星夜を讃美した詞書つきの歌がある。これが

永久　第七十四代鳥羽天皇の御代。

實成　藤原氏。

私のここに顯彰しようとする女性歌人の古今獨歩な特色である。

この不朽な建禮門院右京大夫は、代々能書家を出した世尊寺家の女で行成（ぎょうせい）卿六代の孫に當る。高祖父の伊房、祖父の定信、父の伊行、兄の伊經、甥の行能いづれも書道の達人であつて、古筆（こひつぼん）切その他に幾代となく譽ある記念を遺してゐる。またこの家には「新古今」以後の勅撰集に四十七首を收められた行能の如き作家も出で、その父祖伊經・伊行・伊房も勅撰集や歌合などにその作歌は見えるものの、取りたてていふほどの名吟も聞えない。たゞ「建禮門院右京大夫集」に至つては、時の女流作者の集とは選を異にし、歌そのものよりむしろ詞書が豐かであつて、あたかも「平家物語」の小さな縮圖とも見えるところから、明治晩期になつて史學者・歌學者の推奬を受けるやうになつた。文は眞情の流露を主とし、

行成　平安時代の名筆家で、小野篁・藤原佐理と共に三蹟と稱せられ、世尊寺流といふ。書道の一流を創めた。萬壽四年歿、年五十六。

行能　伊經の子。

技巧のすぐれたところはないけれど、却つてその閲歷から湧いた純な感じが表現されてゐるところに特色をもつ。少くも六十歳を越えた承久・嘉祿頃に三四十年前のことの追憶を書いたものので、大體首尾一貫し、年次もほゞ立つてゐる點も、他の家集とは相違してゐる。「家の集などいひて、歌よむ人こそ書きとゞむるこ」となれ。これは、ゆめ〳〵さにはあらず、たゞあはれにも悲しくも何となく忘れがたく覺ゆることどもの、そのをり〳〵ふと心に覺えしを、思ひ出でらるゝまゝに我が眼ひとつに見んとて書きおくなり。」と書き起して、平家全盛の時代からその沒落に至るまでの榮枯を中心に、親しい人との生別死別より、重衡の捕はれ、維盛の入水、さては女院を大原にたづねまゐらせた悲しい秋を經て、心苦しさに堪へかねて都を立出で、比叡坂本の邊にさすらへて、大雪に大内の橘をしのぶあたり、はては再び後鳥羽天皇に仕

承久　第八十四代順德天皇の御代。

嘉祿　第八十六代後堀河天皇の御代。

重衡　平清盛の子。一の谷の戰に捕へられ、壽永四年奈良で斬られた。年四十一。

維盛　平重盛の子。壽永三年屋島を遁れ出て高野山に入り出家したが、その後熊野の海にも投じたやうに見せかけて跡を隱した。

坂本　今の滋賀縣滋賀郡坂本村。比叡山の東麓。

世の式も云々　「徒然草」の第百六十九段に見える。

ひきかづき臥す

へて、「徒然草」に指摘してあるやうに、「世の式もかはりたる事はなきに」たゞ自分の心の中ばかり碎けまさる悲しさを訴へたくだり、終始緊張して讀まれる。平家が西海に沈んだ同じ年の暮と思はれるが、坂本に暫し假寢をしてゐた頃の一節に、日本文學絶無の文字が味ははれる。

十二月一日ごろなりしやらん、夜に入りて雨とも雪ともなくうち散りて、むら雲さわがしく、ひとへにくもりはてぬものから、むら〳〵星うち消えしたり。ひきかづき臥したるきぬを、更けぬるほど、丑二つばかりにやと思ふほどに、ひきのけて空を見あげたれば、ことに晴れてあさぎ色なるに、光こと〴〵しき星の大きなるが、むらもなく出でたる、なのめならずおもしろく、縹の紙に箔をうち散らしたるにより似たり。今宵はじめて見そめたるこゝちす。さき〴〵も星月夜見なれたることなれど、これはをりからにや、ことなるこゝちするにつけても、たゞ物のみ覺ゆ。

月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれを

今宵知りぬる

題詞の文といひ、歌句といひ、際立つた巧緻を認めないけれど、率直に天象を敍して、星夜に感激し、「たゞ物のみ覺ゆ」と意味深長に餘韻を含ませた筆致は、幾度讀んでも飽きない。かくの如く星夜を讃美した、敍景抒情兼ね備はつた文字は、國文學史上の絶唱といつても過言ではあるまい。「玉葉集」卷十五、雜歌二にも、この歌に「闇なる夜、星の光殊にあざやかにて、晴れたる空は縹の色なるが、今宵見そめたるこゝちして、いとおもしろく覺えければ」と題して錄してあるのは嬉しい。しかし明治以後の國文學史家は、この家集をさへ見過してしまつたくらゐであるから、たまさか取

上げた先覺者でも、ここの一條の如き佳篇をさまで珍重してくれなかつたのは、餘儀ないことであらう。

さすがに彼女は世尊寺家に生れた女性であつた。物凄い深夜の星の景を寫すにふさはしい詞を忘れなかつた。紺色の紙に箔をうち散らしたやうだと星空を形容した。この一句のために右京大夫の個人的特色がおのづとよくあらはされた。家柄はさすがに爭はれぬと感じさせる。紺紙に金箔を砂子のやうに散らした模樣を聯想したのは、彼女の場合、ほんたうに活きた比喩である。世尊寺流の手にも似通ふといはれる「藍紙萬葉」を私たちに想ひ浮べさせもし、追福に書きもしたらう紺紙金泥の經卷をも私たちの眼に映じさせる。私たちは信ずる、あの文句がこの一節に對して畫龍點睛となつてゐると。

繰返していふ、舊日本の文學に於て建禮門院右京大夫は、星夜

藍紙萬葉　銀砂子を散らした薄藍色の紙の卷子本で、伊房の筆といはれる。

畫龍點睛

の讃美の一節に於て無比の光彩を放ち、私たちは永久にこの女性歌人のスターを忘れてはならぬといふことを。（南蠻更紗）

谷崎潤一郎　作家、東京市の人、明治十九年生。

永久に踰ゆべからざる垣

一八　日本の文章と西洋の文章

谷崎潤一郎

我々は、古典の研究と併せて歐米の言語・文章を研究し、その長所を採り入れられるだけは採り入れた方がよいことは、申すまでもありません。しかしながらここに考ふべきことは、言語學的に全く系統を異にする二つの國の文章の間には、永久に踰ゆべからざる垣がある、されば、せつかくの長所も、その垣を踰えて持つて來ると、長所がもはや長所としての役目をせず、却つてこちらの固有の國語の機能をまで破壞してしまふことがあるといふ一事であります。しかも私の見るところでは、明治以來、我々はもう西洋文の長所を採り入れるだけ採り入れたのでありまし

て、これ以上採り入れることは卽ち垣を踰えることになり、我が國文の健全な發達のためには害を及ぼす、いや、既に及ぼしつゝあるのでありますです。ですから今日の場合は、彼の長所を採り入れることよりも、採り入れ過ぎたために生じた混亂を整理する方が、急務ではないかと思ふのであります。

昔、鎌倉時代の我々の祖先は、漢文の語法を學んで、和漢混淆文といふ新體を作りました。ですが、これさへ、よく考へてみますと、決して古代の支那語の構造を採り入れたとはいへません。たとへば、「子曰く、止まるに於て其の止まる所を知る、人を以て鳥に如かざる可けん乎。」といふ風ないひ廻しは、漢文的ではありませうが、孔子樣はこんなぐあひに下から上へ逆に仰しやつたのではありません。實際は、「於止知其所止、可以人而不如鳥乎。」の十四字を、當時の支那音で縱にまつすぐに仰しやつたのであります。昔も

子曰く云々　「大學」に見える語。子は孔子のこと。

今も支那語にはテニヲハがなく、動詞の次に目的格が來ることに變りはありません。また「緡蠻たる黃鳥」などといふ「たる」に當るものは原文にはありません。「たる」は「とある」の略でありませうが、これがなければ、日本語として讀みやうがなく、どうにも意味が通じないので、送假名をしたのであります。してみれば、かくの如きいひ廻しも、結局日本語の範圍を出ないのでありまして、ただ漢文を日本語の語法に當てはめて讀み下すために、多少無理な、新奇ないひ廻しを考へ出した、さうして最初は漢文を讀み下す時にのみ使つてゐたそのいひ廻しを、國文を作るのに應用した、それが和漢混淆文であります。ですから、漢文の影響でかくの如きいひ廻しが發明されたことは事實でありますが、このいひ廻しそのものが漢文の語法ではありません。さやうに、我が國と最も近しい支那の言葉ですら、千年以上も接觸しながら、なかな

緡蠻たる黃鳥　「大學」に「詩に云ふ、緡蠻たる黃鳥、丘隅に止まる。」とある。前の「子曰く、止まるに於て云云」は、その次に續く語である。

か同化しないのでありますから、況や關係の淺い西洋の言葉が、さう易々と採り入れられるはずはないのであります。

元來、我々の國語の缺點の一つは、言葉の數が少いといふ點でありますたとへば獨樂や水車が轉るのも、地球が太陽の周圍を廻るのも、等しく我々は「まはる」もしくは「めぐる」といひます。しかし前者は物それ自身が「まはる」のであり、後者は一物が他物の周りを「まはる」のでありまして、兩者は明らかに違つてをりますが、日本語にはかういふ區別がありません。が、英語は勿論、支那語でも立派に區別してゐます。支那で日本語の「まはる」もしくは「めぐる」に當る語を求めれば、轉・旋・繞・環・巡・周・運・回・循等、實にその數が多いのでありまして、皆幾らかづつ意味が違ひます。獨樂や水車の「まはる」に當るものは轉と旋との二字であり、繞は物の周りを離れず纏ひめぐること、環は環のやうに取圍むこと、巡は巡回して

視察すること、周はぐるりと一まはりすること、運は移り變つて行くこと、回は渦卷き流れること、循は物について行くことで、非常に細かい區別があります。また櫻の花の咲いてゐる花やかな感じをいふにも、日本語では「花やかな」といふ形容動詞しか思ひ出せませんが、漢語を使つてよいとなれば、爛漫・燦爛・燦然・撩亂等、まだ幾らでもあるでありませう。されば我々は「旋轉する」「運行する」等の如く漢語の下へ「爲る」といふ言葉を結び着けて澤山の動詞を作り、「爛漫な」「爛漫たる」「爛漫として」等の如く「な」や「たる」や「として」と結び着けて無數の形容動詞や副詞を作り、國語の語彙の乏しいのを補つて來たのでありまして、この點で我等が漢語に負ふところは多大であります。然るに今日では、いかに漢語の語彙が豐富でも、もうそれだけでは間に合はなくなりました。そこで我々は「タクシー」「タイヤ」「ガソリン」「シリンダー」「メーター」などの如

シリンダー　機械中に裝置した圓筒。

く英語をそのまゝ日本語化し、或は「語彙」「科學」「文明」などの如く漢字を借りて西洋の言葉を飜譯したものを用ひるやうになりました。これは實際かうしなければ用が足せないのでありますから、それで少しも差支へありません我等の祖先がかつて漢語を採り入れた如く、我等も歐米の言葉を採り入れて國語を富ますのは、まことに結構なことであります。しかしながら、すべて物事は、よいことばかりはありません漢語の上に西洋語飜譯語までを加へて、我々の國語は俄に語彙が豐富になりましたが、そのために我々はあまりにも言葉の力を賴り過ぎ、おしやべりになり過ぎて、沈默の效果を忘れるやうになりました。

國語といふものは國民性と切つても切れない關係にあるのでありまして、日本語の語彙が乏しいことは必ずしも我等の文化が西洋や支那に劣つてゐるといふ意味ではありません。それ

よりもむしろ、我等の國民性がおしやべりでない證據であります。我等日本人は戰爭には強いが、いつも外交の談判になると、ひけを取ります。古來支那や西洋には雄辯をもつて聞えた偉人がありますが、日本の歷史にはまづ見當りません。その反對に、我等は昔から能辯の人を輕蔑する風がありました。實際にまた、第一流の人物には寡言沈默の人が多く、能辯家となると、二流三流に下る場合が多いのであります。ですから我等は、支那人や西洋人ほど言語の力を賴みとしません。辯舌の效果を信用しません。これは何に原因するかといふのに、一つには我々が正直なせゐでありませう。つまり我々は、實行するところを見てもらへれば、わかる人はわかつてくれる、自ら省みて天地神明に恥ぢなければ、別にくど〳〵といひわけしたり、吹聽したりするには及ばぬといふ氣があるのでありませう。孔子の言葉にも、「巧言令色鮮し仁。」

自ら省みて天地神明に恥ぢない

巧言令色云々「論語」學而篇に見える。

以心傳心

内輪に見積る

といつてありまして、おしやべりだから嘘つきであるとは限りませんけれども、西洋は知らず、東洋に於ては、おしやべりの人はとかく物事を修飾して、實際以上に買ひかぶらせる癖があり、信用されない傾きがありますので、君子は言葉を愼むことを美德の一つに數へたのでありますが、とりわけ日本人は、この點に於て潔癖が强いのであります。我々の間には、支那にもない「腹藝」といふ言葉があつて、沈默を藝術の上にまで持つて來てゐます。また「以心傳心」とか、「肝膽相照らす」とかいふ言葉もあつて、心に誠さへあれば、默つて向ひあつてゐても、おのづからそれが先方の胸に通ずる、千萬言を費すよりも、さういふ暗默の諒解の方が尊いのであるといふ信念をもつてをります。我々にかういふ氣風や信念があるといふのは、一層深く考へてみますと、東洋人特有の内氣な性質に由來するのでありまして、すべて我々は、物事を内

偶然でない

輪に見積ります。十の實力があるものなら、七か八しかないやうに自分も思ひ、人にも見せかける、それが謙讓の德にかなふとしました。西洋人はその反對でありまして、十のものを十といふのに何の遠慮も氣がねもしません。彼等も謙讓の德を知らないことはないでせうが、しかし東洋流の謙讓は、彼等にいはせると卑怯でもあり、因循でもあり、或場合には不正直でさへあるかも知れません。かういふことは、一長一短でありまして、何事によらず西洋人が進取的であり、東洋人が退嬰的であるのを見れば、我等が彼等に學ぶべきところも多いのでありますが、優劣は暫く論じないとして、上に述べたやうな日本人の國民性を考へますと、我々の國語がおしやべりに適しないやうに發達したのも、偶然でないことが知れるのであります。なほもう一ついひたいことは、我々は島國人であるせゐか、西洋人や支那人に比べると、しつ

こくない。よくいへば、あつさりしてゐて、あきらめがよいのでありますが、惡くいへば、氣短で、執着力がないので、一つ事をあまりくど〳〵いふのを嫌ひます。いつてみても始まらない、どうせこれ以上わかりつこはないと思つたり、なるやうにしかならないと思へば、いい加減に見切りをつけて、あきらめてしまふ。この性質がやはり國語に影響してゐるに違ひないのであります。

國語の長所・短所といふものは、かくの如くその國民性に深い根ざしを置いてゐるのでありますから、國民性を變へないで、國語だけを改めようとしても無理でありますですから我々は、漢語や西洋語の語彙を採り入れて、國語の不足を補ふことは結構でありますが、それにもおのづから程度があることを忘れてはなりません。

（文章讀本）

中村孝也（なかむらかうや）
歷史家、文學博士、東京帝國大學史料編纂官、群馬縣の人、明治十八年生。

想像の鵬翼を張る

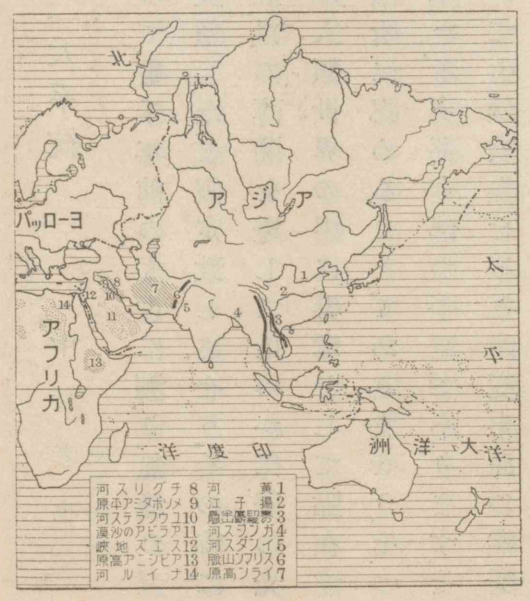
一九　世界文化の二大系統

中村孝也

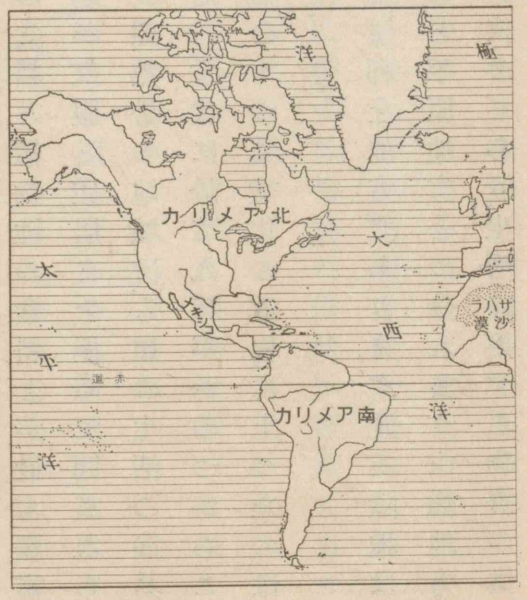
試みに想像の鵬翼を張つて、數千年前の太古に溯り、無邊の天空に翔りながら全地球を展望したと假定致しませう。その時に我等は、あたかも晩春初夏、五月の薄闇を透してほのかに螢の光を眺めるが如く、未開蒙昧の人類世界の中に、髣髴として點在する文化の光を、凡そ五つの箇所に認めることでありませう。その一は、黃河及び揚子江の流域なる支那本部の平原であります。その二は、それより西南に赴いて、山嶽重疊せる東印度半島の縱斷山脈を越えたところ、ガンジス河及びインダス河の流域なる印度の平原であります。その三は、更に西に向ひ、スリマン山脈を下に見てイランの高原を過ぎたところ、ユウフラテス及びチグリス二大河の流域たるメソポタミアの平原であります。その四は、

それよりまた西に移つて、アラビアの沙漠を後にし、スエズの地峽を渡つたところ、アビシニアの高原に、時を定めて降る雨の流れ流れるナイル河、その兩岸の沃土おのづからにして豐饒な穀物を生產するエジプトの平原であります。而してその五は、更に西の方荒涼たるサハラの沙漠を横ぎり、大西洋のあなた煙波縹渺たるところ、メキシコの高原が實にそれであります。

凡そこれ等の五つの箇所に就いて仔細に觀察すれば、相互に共通する若干の事情を發見するでありませう。一には、その多くが熱帶及び亞熱帶に屬すること、二には、その多くが廣大な平原の地方であること、三には、その多くが大河の流域であり、また海岸に接近せることなどで、これ等は最も著しい事項であります。畢竟これ人類の生活を規制するところの自然に、三つの大いなる要素が存するに因るのであります。それは太陽であり、大地であり、また水であります。



生活を規制する



太陽は光と熱とを放射して、生命の根源を養つてくれます。光

文化の道程に上る

と熱との恩惠を豐かに享受する地域に於ては、生命の發育が十分に成し遂げられます。熱帶地方はまさにその地域であります。そこには太陽が直射することによつて、最も多量の光と熱とが惜しげもなく撒き散らされてをります。そこには特に勞作を用ひることなくして、動物性の食料と植物性の食料とが最も豐富に存在します。そこには溫熱が衣服と住居とを極めて簡易ならしめます。要するに熱帶及び亞熱帶の地域は、人類の生活の簡易にして安樂な所でありました。古代に於て人類がおのづからこの地域に集合し、生活の餘力をもつて文化の道程に上つたのは、蓋しこれに基づくのでした。

平原は人類の生活に最も便利な地方であります。凡そ陸地は、これを大別すれば山嶽地方と平原地方とに分れます。山嶽地方は、人類の生活し得る地域が狹小であり、生活に要する物資の供

切瑳琢磨

給が薄少であり、交通が不便であり、地形が割據的であるために、民族相互の接觸が少く、あらゆる方面から見るも文化の發達が遲々として進みません。これに反して平原地方は、人類の生活し得る地域が濶大であり、生活に要する物資の供給が豐富であり、交通が便利であり、地形がからりと開けてゐるから、民族相互の關係が複雜となり、生存競爭が烈しく行はれ、切瑳琢磨の結果、こに著しい文化の進歩を見るに至るのであります。

河と海とはまた文化の大いなる源泉であります。人は水なくして生きることが出來ません。故に常に水を求めて集合します。凡そ人類の移住してゆく跡をたづねれば、必ず河流の流れる溪谷を經て、山を越え、嶺を踰(わた)り、平野を横ぎり、海のあなたへ、常に滾滾として湧き出づる清水と、溶々として流れる河流のほとりを慕ひあこがれて移つてゐることを見るでありませう。河流は湛

自然の趨勢

へては湖沼となり、流れ落ちては海洋となります。魚介と、海草と、動物性並びに植物性の食料は、ここに無盡藏の寶庫を形成してをります。舟筏を浮べれば、極めて容易に交通・通信の路が開かれます。古代の民族が大河の流域や、海洋に接近せるところに集合したのは、蓋し自然の趨勢でありました。

試みにこれを上述せる五つの地方に當てはめてみれば、支那平原が溫帶に屬する外、他の四箇所はみな熱帶及び亞熱帶に屬してをり、メキシコ地方が高原であり、大河の流域でない外、他の四箇所はみな平原であり、大河の流域であります。そしてメキシコ高原すらも東西に海を控へてをりました。但し、メキシコは古代に於て優秀な文化を發達させたけれど、歐亞大陸とかけ離れて孤立してゐた故に、例へば獨り咲いて獨り散る谷間の白百合の如く、人に知られぬ運命をたどつて衰亡し、今日研究家によつ

パミール高原
中央アジアの高原。

識者の夙に知るところ

て討査せられつゝある狀態ですから、世界文化の本流に影響することは殆どなかつたといつても過言ではありますまい。されば暫くこれを除外して考へる時に、他の四箇所の文化に就いては、おのづから二大系統の存在することを考察し得るでありませう。それは南方文化の系統と北方文化の系統とであります。換言すれば、熱帶文化の系統と溫帶文化の系統とであります。エジプト・メソポタミア・印度の文化は前者を代表し、支那の文化は後者を代表します。而して我が日本文化は、支那と共に溫帶文化の系統に屬します。

古代文化にこの二大系統を生ぜしめたのは、歐亞大陸の地形の然らしめるところでした。歐亞大陸は、パミール高原を中軸として東北より西方に連亙する幾多の山脈によつて、表裏南北の兩域に分たれることは、識者の夙に知るところであります。この

大連嶺の南方傾斜地は、大體に於て熱帶性であり、その北方傾斜地は、大體に於て溫帶性であり、延いて寒帶に及んでをります。エジプト・メソポタミア・印度は、まさにこの南方傾斜地にあつて、熱帶文化を構成した地方でありました。

熱帶文化は自然の恩惠を最も豐富に與へられて發達したものでした。太陽よりは多量の光と熱とを受け、平原と河海とよりは潤澤な食料の供給を受け、陸上・水上の交通・通信は容易であり、結局、生活の安樂を樂しむことが出來るのでした。故にこれ等の地方に於て古代文化を發達せしめた民族は、自然と親密な關係を有するものでありました。彼等は自然に育まれて、これを愛し、これと順應し、これと妥協し、これに倚賴しつゝ生活を營みました。故に南方文化は概して華麗であり、光明に輝く幻想的氣分に富み、文學・藝術に秀で、自由に個性を發揚せしめる傾向に富んだ

ものでした。しかしながら、溫帶文化は著しく色彩が違つてをります。

溫帶文化は自然の恩惠に浴することが熱帶文化よりも甚だ薄少であります。太陽より受ける光と熱との分量が少いのです。隨つて動植物の發育は、熱帶地方ほど十分なるを得ません。氣候は變化が多く、衣服も住居も構造が複雜となり、食料の生產にも多大の勞力を要します。一言にしていへば、自然は決してこの地方の住民を常に愛撫するものではありませんでした。否、自然は往々にして彼等を威嚇し、彼等の衣食住を不安ならしめるのでありました。この傾向は溫帶より寒帶へ近づくに隨つてますます增加してゆきます。ですから、この地方の住民は、往々にして自然と戰ひ、これを征服し、これを驅使し、これを利用して、自己の生活を建設する必要に迫られます。ここに於て彼等の間には犀利

な理智と鞏固な意志とが養成せられて來ました。彼等はこれをもつて自然と戰ひ、これを征服することによつて彼等の文化を建設したのでありました。卽ち彼等の生活は不斷の努力であり、永久の奮鬪であります。故に北方文化は概して質實であり、實際的氣分に富み、政治・經濟・法律等に長所を有し、組織的傾向が强く、あたかも鋼鐵のやうに、打てば則ち鏘然として高鳴りするのでした。

打てば……高鳴りする

以上は世界文化を横に地理的に見て、二大系統を分けたものですが、これを縱に歷史的に見れば、違つた意味に於て、また二大系統を分つことが出來ます。それは西洋文化系統と東洋文化系統とであります。

西洋文化系統は、かのエジプト文化とメソポタミア文化とが合流してヨーロッパに入り、ギリシヤ文化の發達を促し、ローマ

文化の進歩を助け、中世のキリスト教文化、近世のゲルマン民族の文化と合して、西洋史上に於ける大なる潮流をつくつたものであります。

東洋文化系統は、かの印度文化と支那文化とが合流し、近世に至つて、特に多く西洋文化の影響を受け、東洋史上に於ける大なる潮流をつくつたものであります。この二大潮流は過去に於ても互に影響しあつたものでありますが、今日に於ては一層接近し、一層融和せんとしつゝあるけれど、いまだ渾一的世界的文化潮流を形成するに至りません。

日本群島は大部分溫帶に屬してをりますので、群島たる特質上、一般論に該當せざるところは多少あるとしても、その文化はおのづから北方文化系統に屬するものであります。回顧すれば肇國より幾千年、我等の祖先が經過し來れる文化の段階は、これ

を貫くに不斷の努力と永久の奮闘とをもつてしたものでありました。我等の有する國民文化は、汗と膏と血と涙との結晶であつて、我等の生活と共に最も貴重な寶玉であります。燦たる國史の精華は、畢竟この寶玉の輝きに外ならないのであります。庶幾くは健闘の文化を讃美せよ。明敏な理智の閃きと、鐵石の如き意志の强さとは、我等の生活をして更に〳〵向上進歩せしめるでありませう。

（日本文化史要）

汗と膏と血と涙との結晶

庶幾くは

國民精神篇

日本文學の特質　その二

一

日本文學の表現上の特質として最も著しいのは、象徴的であることであらう。小さな形象の中に、豐富な内容を壓縮して盛らうとし、或は斷片をもつて全體を髣髴させようとすればそこには當然深い含蓄を與へ、微妙な餘韻餘情を含ませる必要が生じて來る。そして表現上の手法もおのづから象徴的とならざるを得ないのである。

この象徴的な表現の對象となるものには、理想や義理をあらはす理智的なものと、感情や趣致などをあらはす情趣的なもの

とがあり、後者の中には、莊重・高雅・優艶・靜寂・枯淡・洒脫などがある。かの「幽玄」や「わび」「さび」の如きは、これ等の情趣を包含してゐるもので、象徴的表現の代表的內容となつてゐる。

一體、西洋の文學作品には、或一つの美の世界を描く場合に、それを殘る隈なく表現してしまふといふ傾向が著しい。つまり、西洋の文學の表現樣式は、初からすつかり出來上つてしまつてゐるものであつて、讀者はたゞ受身になつてそれを眺めるだけである。これに反して、日本の文學は、美の世界を隅々まで見ることは見ても、そのすべてを言葉にあらはしてしまふことをしない。必ず相當の餘地を殘して表現する。或は、なるべく言葉すくなに表現して、全體を象徴しようとする。そして一方に於て讀者は、その鑑賞力を能動的に働かせて、作者のあらはさうとしてゐる美の世界を求め味はつて行くのである。いはば、一つの作品を完成

するために、讀者も一部の役割をつとめるやうなものであつて、作者の魂と讀者の魂とは、作品を介して完全に融合することになるのである。そして、かういふ象徴的表現が行はれるのは、單に文學に於てばかりでなく、繪畫などの方面でも、同じく發揮されてゐるものであることはいふまでもない。

隨つて、我が國の文學に於ては、敍景なども純客觀的な立場から試みられる場合が極めて少い。多くは、景によつて情を抒べ、情によつて景を敍するといふやうな、いはゆる景情一致の妙趣を發揮してゐるのであつて、かういふ象徴的な手法は、和歌や俳句の方面に於て一層顯著である。例へば、

秋深き隣は何をする人ぞ

といふ芭蕉の句は、實際に隣人のことをあらはしてゐると同時にまた作者の人生に於ける孤獨感・寂寥感といふやうな情をも、

切實に盛りこんでゐるものである。兼好は、「すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。」といつてゐるが、このやうに自然を見るにも心眼をもつてし、それを象徴的に文學に表現して、鑑賞者の魂と一如にならうと努めるのが、日本文學の特質なのである。

次に日本文學は、浪漫的といふことを、表現上の一特質としてゐる。浪漫的な表現は、想像や感情を本位として生活を現實以上に高揚させようとするところに發し、現實的な觀察をもととした表現と相對立するものである。

この表現樣式は、「古事記」「日本書紀」「風土記」等の神話・傳說に民族意識を强調する手法として用ひられ、下つて平安時代に於ては、「もののあはれ」といふ精神をあらはすために、物語にも和歌にも盛んに用ひられた。更に象徴的な表現と結びついては謠曲に適用され、優美高雅な幻想的世界を展開させてゐる。その他、戰記物

すべて云々「徒然草」の第百三十七段に見える。

語にも、お伽草子にも、江戸時代の俳諧や小說・戲曲にも、一樣にこの浪漫的表現の用ひられてゐることが見出されるのである。

しかし一方に於ては、この浪漫的表現と相對立する現實的表現も、日本文學の表現上の一特質となつてゐることは見逃せない。これは、日本國民性の一面たる現實的・實行的であるところが、おのづからあらはれ出たものであらうと考へられるが、とにかくこの現實的表現は、浪漫的表現と相對立しながらも、微妙な關聯を保つて、日本文學の一特質を構成してゐるのである。

この表現は、日記・隨筆の類にはもとより、歷史物語・戰記物語等にも見られ、「源氏物語」などに於ても、浪漫的表現と相俟つて用ひられて、作品を生彩づけてゐる。室町時代の狂言に至つては、同時代の謠曲が浪漫的・象徴的表現の精粹であるのに對し、現實的表現の極致を示してゐるものであり、江戸時代の小說・戲曲の類に

見られる世態・人情の鮮明な表現もまたこれである。明治以後になつては、西洋の現實的な手法をもつた作品が相次いで譯出された結果、この表現は、浪漫的表現を壓するまでに行はれるやうになつた。

二

日本文學の內容上の特質もまた、國民性を反映したものである。卽ち綜合的・全一的な國民性の作用により、道德・宗教・歷史といふやうな人生的要素と、山川・草木・風月などの自然的要素とは、常に融合して作品中に生かされてゐる。これは一面から見れば、氣候溫和に、山川の秀麗な國土に育くまれた日本國民の、自然に對する愛情の深さからも來てゐるものであることは論を俟たない。

また日本國民は、統一・調和を重んじ、穩健・中正を愛するところ

から、文學の內容に於て、對立・鬪爭といふやうな事象をあらはす場合にも、それをあるがまゝに取扱はず、或は破邪顯正の精神を働かせ、或は調和完全への道をたどらせるといふ風に工夫する。戰記物語などに於て、剛健勇壯な世界の中にも、優雅な情趣を漂はせ、殺伐な戰亂の巷にも、詩情を搖曳させてゐるが如き、すべて對蹠的な事柄の配合調和を期する國民性のあらはれである。

最後に、日本文學の內容上の一特質をなしてゐるものは、傳統を重んずる精神である。勿論、これもまた、文學以前に國民性の特質となつてゐるものであつて、忠君愛國・敬神崇祖・家名發揚等の諸精神の母胎となつてゐるのであるが、これ等の精神は、文學作品の中にも潑剌としてあらはされてゐる。かの大伴家持の、

大伴の　遠つ神祖の　その名をば　大來目主と
負ひもちて　仕へし官　海行かば　水漬くかばね

大伴の云々　「萬葉集」卷十八に見える「陸奥國より金を出せる詔書を賀ぐ歌」の一節。

山行かば　草むすかばね　大君の　邊にこそ死な
め　かへりみは　せじと言立て……

といふ長歌の如きは、その典型的な作品であらう。その他にも例は無數に見出されるが、かういふ精神が內容となつてゐることは、國家組織の特殊性と相並んで、日本文學を最も鮮かに特色づけてゐるものである。

要ゝるに日本文學の特質は、我が國民性の反映であり、我が國民性の誇は、そのまゝ日本文學の誇となるべきものである。隨つて、我々が文學作品に臨む時も、單に文學の上からのみ味はは、このやうな關聯を常に念頭に置いて、その作品の眞實の趣や價値を鑑賞するやうに心がけなければならないのである。

日本女子讀本　改制第一版　卷八　終

昭和十二年六月二十五日印刷
昭和十二年六月二十八日發行
昭和十二年十二月五日訂正再版印刷
昭和十二年十二月八日訂正再版發行

日本女子讀本　改制第一版
各卷　定價　金六拾錢

著作權所有

編者　東京市世田谷區世田谷一丁目九七八番地　高木武
發行者　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社　富山房
代表者　坂本嘉治馬
印刷所　東京市神田區錦町三丁目十一番地　精興社

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社　富山房
電話神田二、一七一—二、一七八番
振替貯金口座東京五〇一番

野本製